

2/1022  
HISTORY OF DOCTRINE

BY  
HENRY C. SHELDON

發行所

メソヂスト出版舎

# 教理歴史

松浦松胤譯

ヘンリー・シー・シェルドン原著



此書は謹で原著者エチ、シ、シエルドン氏み奉呈する者也

氏の教理歴史の學に該博深遠なる其事實を記  
するに不偏不黨ある深く譯者の尊敬する所あり

此の書は本館不意に著し、神學の發達を期す  
神學の發達を期す、神學の發達を期す、其の事蹟を記す

序

此の書は本館不意に著し、神學の發達を期す、神學の發達を期す、其の事蹟を記す

序

弘道の業日に興り神學の講究月に密にして良書の需用甚だ急かり我東京英和學校神學部長ミルトン、エス、ヴェル氏并に同部卒業生松浦松胤氏等共にシエルドン氏の教理史を翻譯して急需の一端を充さんと欲し、匪勉時流に全や其第廿版を世に公にせり是邦文基督教々理史御稿矢張り我輩豈に之を賀せざるを得んや、然るに原著者シエルドン博士は米國ボストン大學の教授にして教理史に専門とすると茲に殆ど廿年氏曾て此科專修の爲め久しく日耳曼國に遊び、英文を以て著述せる教理史にして此右に出づる者は恐くは之を今日に得難しとせん其我國諸教會の教理史に志ある兄弟に裨益ある

は疑ふ可らざるあり惟譯者の志目下の需用に應ずるを  
 專にせしを以て完璧を待つとの違あらざるあり蓋し名璞  
 を櫃中に藏して暗黒の勢を逞ふせむめんよりは寧ろ先  
 づ燭光の勤めを執り漸く旭日と化む去らんことを期す  
 るにありありと見ゆべし

聊が巻端に書じて譯者の勞を謝し併せて江湖の爲めに  
 此貴重の寶を得たるを賀す矣

東京英和學校に於て  
 明治廿五年三月

本多庸一

例言  
 此書ハ米國莫斯頓大學教授シエル博士の著ハす所カ  
 リ氏ヲ殆ど十有六年同大學に於て歴史の教授をかせし  
 人にして此學に精細カる人皆知る所アリ且つ此著書ハ  
 千八百八十五年に至る迄の教理發達の狀態を叙述した  
 る者カレバ神學の歴史中にてハ最近の著書の一カる可  
 し元來教理歴史の學ハ近代の者にして未だ完全ニ發達  
 するに至らずと雖ども其必要ニ至てハ苟も神學を修む  
 る者の能ク知る所アリ

著者シエル博士氏は日本譯の擧を聞て之を可とし一言  
 を送り且つ基督教理發達の歴史を研究すべきの理由を  
 示されたり殊に現今の日本宗教大變動の時代に當ては

古代よりの教理變遷の次第を知るの必要尤も著るべき者  
あはれとて其書は松浦松胤の手に成ると雖ども書中のラテン  
翻譯を重に松浦松胤の手に成ると雖ども書中のラテン  
語の訛や語及びヒゼルマン語等の文章はエム、エス、ヴェ  
十の英譯する所あれば其責任は彼に在るありと雖ども  
別所梅之助君は此書を譯するに於て大なる助を與へら  
れたり第一期第二期及び第三期の天地創造論及び教會  
論の章は全く同君の手に成る者あり謹んで之を謝せしむ  
此他尙幫助を與へられたる諸君多し此等の諸君に向て  
も亦謝辭を呈せざる可らずと雖ども謝せしむる者あり  
此書は青山神學校の教課書に用ひん爲し譯せし者あり  
も亦之を廣く世に公にし以て神學を研究する者の一

助とかさんと欲するあり  
翻譯の勿論原著者及發行者の承諾を得たる者あり  
但し英文の版權は素より彼等の抱持する所ありとて

青山神學校に於て

明治廿五年三月

ミルトン、エス、ヴェール

松浦松胤 誌



の根源ある神と親和を志すに至り同情は正當なる方向を  
取るに至り斯くして道理の取る可き難業と經驗の助を  
被る者も亦少くなく其の基礎の意義を識せしむる  
歴史的の基礎を以て其の道理は空想思辨の迷路を脱する  
能はざるべし其の道理乃ち思考究察を凝らすとかくんば歴  
史を解するに偏見僻説を免かるべし能く其の心靈上の性質  
深く神の愛と義に感服するに至らば其の心意を或る最  
大切要の眞理を酌量すべし其の標準を次ぎて云ふべき可  
す故に歴史道理及び經驗の三要素ある者は各其適當な  
る地位を占め得て初めて完全なる教理の系統に進むを  
得べし其の意を識せしむるに其の眞意を識せしむるに  
余が此書著す目的の斯かる系統を熱望する所の人々

を助成せしむるに故に歴史の大原野を明瞭公平に  
搜索し是は依て確實明瞭の断定をなすに必要なる下題  
を供給するを以て止むべし余が敢て其箇の教説を代表  
せしむるに若くは之を辨護せる爲に此書を著述するに非  
ず只欲する所は此書を以て使徒時代より以降基督教の  
歴史に生じたる事實の智力的即ち教理上の方面を反映  
して一目瞭然たる明鏡となさんと欲し是を以  
て殊更に三種の結論を引取るをなさんと欲す  
を以て各自銘々に結論を記しむるの二助をなさんと欲す  
るが如し其の未だ其の眞意を識せしむるに其の眞意を識せしむるに  
讀者は歴史研究の歩を次第に進むるに従て不幸なる諸  
説紛々として互に相衝突するの慘狀を遭遇せしむるは

るべし然れども記憶せられよ基督教を其解釋者の何人よりも大なるを夫れ諸説の唱道者は其功や大其業や盛なりと雖も未だ曾て歴史上の智識と道理及び經驗の三者の一致ある理想を自ら成し遂げたる者あらざるあり、是を以て歴史に於て矛盾錯雜不完全なる解釋滿ちくたりの驚愕よりは完全なる解釋の必要は一層大なり基督教を完全に解釋せんには完全なる人に非ざれば能はず然れども人類は歩一歩を進めて益々基督教ある系統の高尙ある頂點に接近し力を盡くして途あり真理あり、生命ありと云へる人の不朽の思想に到達せんと勉むるを豈に榮光ある業と非ずや

主紀元二千八百九十年十二月二十五日

ポストン大學校に於て

エナ、シー、シエルドン誌



# 教理歴史目錄

## 緒言

### 總論

第一期(九十年より三百二十年に至る)

第一章 此時期中の教理發達の要素

第一節 哲學

第二節 異教の批評及び異端

第三節 著述家及び其著者

第四節 聖書及び傳説

第二章 神性

第一節 神の存在本質及び附性

第二節 「ロゴス」即ち神の子

第三節 聖靈の教理

目錄

一頁

十八三頁

三十二頁

四十七頁

五十五頁

七十九頁

九十四頁

百三十三頁

第三章 創造及び被造物

第一節 世界の創造

第二節 天使及び悪魔

第三節 人間論

第四章 贖主及び贖罪の教理

第一節 基督の身位

第二節 基督の贖罪事業

第三節 基督の事業の恩恵に與る事

第五章 教會及び聖禮典

第一節 教會論

第二節 禮典論

第六章 終末學

第一 千福年

第二 死と復生との中間の状態

百三十九頁

百四十二頁

百四十六頁

百六十三頁

百七十頁

百八十六頁

百九十九頁

二百三頁

二百十七頁

二百十九頁

第三 復活

第四 結局の賞罰

第二期 (三百二十年より七百二十六年)

總論

第一章 此時期中に於ける教理發達の要素

第一節 哲學

第二節 修道院

第三節 教會と國家の關係

第四節 著述家及び其著書

第五節 聖書及び傳説

第二章 神性論

第一節 神の存在本質及び附性

第二節 三位一體説

第三章 創造及び被造物

目録

二百二十四頁

二百二十八頁

二百三十三頁

二百三十七頁

二百五十三頁

二百五十五頁

二百六十二頁

二百七十五頁

二百八十六頁

第一節	世界の創造	三百十七頁
第二節	天使及び惡魔	三百二十一頁
第三節	人間論	三百二十六頁
第四章	贖主及び贖罪の教理	
第一節	基督の身位	三百五十五頁
第二節	基督の贖罪事業	三百六十六頁
第三節	基督の事業の恩恵に與る事	三百七十五頁
第五章	教會及び聖禮典	
第一節	教會論	三百九十二頁
第二節	禮典論	三百九十五頁
第六章		
第一	千福年	四百十一頁
第二	死と復生との中間の状態	四百十二頁
第三	復活	四百十五頁

四

第四	終局の賞罰	四百十六頁
第三期	(七百二十六年より千五百十七年)	
總論		四百二十三頁
第一章	此時期中教理發達の要素	
第一節	哲學	四百三十五頁
第二節	著述家諸學校及び諸系統	四百五十一頁
第三節	聖書と傳説	四百七十一頁
第二章	神性	
第一節	神の存在本質及び附性	四百七十九頁
第二節	三位一體説	四百九十二頁
第三章	創造及び被造物	
第一節	世界の創造	四百九十七頁
第二節	天使論	四百九十九頁
第三節	人間論	五百一頁

五

目錄

第四章 贖主及び贖罪の教理

  第一節 基督の身位 五百二十一頁

  第二節 基督の贖罪事業 五百二十八頁

  第三節 基督の事業の恩恵に與る事 五百四十二頁

第五章 教會及び聖禮典

  第一節 教會論 五百六十一頁

  第二節 禮典論 五百六十六頁

第六章 終末學

  第一節 千福年 五百八十九頁

  第二節 死と復生との中間の状態 五百八十九頁

  第三節 復活 五百九十一頁

  第四節 終極の賞罰 五百九十二頁

第四期 (千五百十七年より千七百二十年)

  總論 五百九十七頁

第一章 此時期中教理發達の要素

  第一節 哲學 六百十三頁

  第二節 教派、信條、及び著述家 六百三十八頁

  第三節 聖書及び傳説 七百五頁

第二章

  第一節 神の存在本質及び附性 七百三十九頁

  第二節 三位一體説 七百五十六頁

第三章 創造及び被造物

  第一節 創造論 七百六十九頁

  第二節 天使論 七百七十頁

  第三節 人間論 七百七十二頁

第四章 贖主及び贖罪の教理

  第一節 基督の身位 八百十五頁

  第二節 基督の贖罪事業 八百二十頁

目錄

第三節 基督の事業の恩恵に與る事 八百四十二頁

第五章 教會及び禮典 八百八十七頁

第一節 教會論 八百九十九頁

第二節 禮典論 九百三十三頁

第六章 終末學 九百三十三頁

第一節 千福年 九百三十三頁

第二節 死と復活との中間の状態 九百三十三頁

第三節 復活及び結局の賞罰 九百三十六頁

第五期 (千七百二十年より千八百八十五年)

總論 九百四十一頁

第一章 此時期中教理發達の要素 九百四十三頁

第一節 哲學 千四頁

第二節 教派、信條、及び著述家 千三十六頁

第三節 聖書及び傳説

第二章 神性論 千六十三頁

第一節 神の存在及び附性 千七十九頁

第二節 三位一躰説 千九十一頁

第三章 創造及び被造物 千九十七頁

第一節 世界の創造 千九十八頁

第二節 天使論 千九十八頁

第三節 人間論 千九十八頁

第四章 贖主及び贖罪の教理 千百三十五頁

第一節 基督の身位 千百四十三頁

第二節 基督の贖罪事業 千百五十六頁

第三節 基督の事業の恩恵に與る事 千百七十九頁

第五章 教會及び禮典 千百八十四頁

第一節 教會論 千百七十九頁

第二節 禮典論 千百八十四頁

目錄 九

第六章 終末學

第一 千福年

第二 死と復生との中間の状態

第三 復活

第四 結局の賞罰

六

千九百九十三頁

千九百九十六頁

千九百九十七頁

千二百一頁

千二百二十五頁

千二百八十八頁

千二百九十八頁

千二百九十九頁

千二百九十九頁

千二百九十九頁

目錄

題目見出

第一期 總論及び其他雜門

第二期 教理の發達は免る可らざる理由。教理の歴史を熟知するの利益。教理歴史の位置。題目を撰擇するの規則。誤謬の解釋を慎むべきこと。五大時期及び各時期の特質。

第三期 異教徒の批評及び異端家が教理發達の上に及ぼせる刺動。異端に反對する正統派の熱心。三種の異端。猶太の異端—エピオン派。エピオン派が初代教會に大多數を占有せざりし証據。ノスタック派、其内の諸派の一致する点、其異なる點。マニヘアン派。モナキアン派の二種類。

第四期 第二期に於て殊に辨論の熱心を喚起するに至らしめた

題目見出

題目見出

題目見出

題目見出

題目見出

題目見出

題目見出

題目見出

題目見出

題目見出

題目見出

題目見出

題目見出

る境遇。熱狂暴論の報酬。……………二二三—二三六  
修道院の起興及び擴張。教理上に及ぼせる其勢力。……………二五〇—二五一

教會と國家との關係。此關係の教理上及ぼせる結果。……………二五三—二五五

第三期、希臘教會と教理發達との關係。該教會尤も有名なる學者。希臘教會及びラテン教會分離の原因及び時日。中世時期の異端派。「異端及び分離者の生ずる重かる機會」……………四二二—四三三

第四期、宗教改革は基督教歴史中に一大切要の地位を占む。宗教改革の發起点。先代の發達より孵化しルீタル一身の經驗より展開し來る。祭司の中保職、聖經の憑據、解釋の自由等に論及せること。……………五九七—六〇六  
宗教改革と初代教會立場との關係、宗教改革の目的主

義より來る論理上の結果。新教の過度の個人主義、其皮相の爭論。心靈的の一致新教内よ生長するを望むの理……………六〇七—六一一

第五期、近代本源批評の事業。其多分らしき結果……………九四一—九四二

第二期、哲學と教理發達との關係……………  
初代基督教はソクラテス前の哲學を注意せざりし所以。

エピクリアン派及びストアック派の基督教の尊敬を得ざりし理由。アリストートルよりも寧ろプレトローを尊信せる理由。基督教徒の尊信を得たるプレトロー派の特点。プレトロー派を稱賛せる初代師父の言。異教哲學全体の價値に關する諸説。異教哲學が初代基督教神學に及ぼせる實際の功。……………三—三三—二

第二期、第二期の神學者等が異教哲學に對する感情。プレトロー  
題目見出

及びアリストートルを尊信するの度。新プレト派の開祖并に其重なる代表者。其希臘哲學の發達中に占有する位置。其主要の点、プロテナス提出す。其書プレト派を離れたる点。此時期の初めの學者及び後の學者が新プレト派を稱賛せし度。偽デオニシアスの書。其起原の時日。之に對する教會の感情。其教訓の特点。其新プレト派と接近するの点。……………二二七—二五〇

第三期、  
煩瑣學時代に於て哲學の尊信せられし度。當時の特別なる哲學上の要求。並にアリストートルを尊信するの度増加せること。プレト派とアリストートル派との差違の點。此兩派の玄奧教に對する地位。アリストートルを尊信したる學者等の証言。西方にアリストートルの書行はるゝに至りし状態並に之を使用すべき命令。此時期の終に及でプレト派復興す。回々教並に猶太

教の哲學者。偽デオニシアスの著書の勢力。名目論並に實跡論。上古の學者の採決。煩瑣學者等の立場。此問題の神學上の意味。煩瑣學者の材料及び形式の區別……………四三五—四五二

第四期、近世哲學への遷轉。近世哲學の二重の起原即ちペリコン及びデカール。其各自異様の傾向。ペリコンが哲學に與へたる流。及び其天啓宗教との關係。ホッペスの感覺教。ホッペスの天啓宗教に對する形式的の状態。氏の哲學の天啓宗教に對する真實的の状態。ロックの哲學の感覺教—物質説とは云はず—に接近すると。觀念説の爲に偶然途を供せり。道理と信仰の關係に付てロック及びペリコンの差……………六一三—六二五

デカールは智識の基礎を得ん爲め神學的下題を重じたり。デカールの系統には神の原由力重を占む。又心



意と物質との差違を明白にす。氏の天啓宗教に對する感情。ゲリックスがデカートの系統より引きたる結論。マレブランシの結論。スピノザの凡神教。氏の實体の定義。氏の心意及び肉體の定義。氏の自由及び結局原因の觀念の説明。氏の基督、基督教の聖經、及び奇跡に關する思想。六二六—六三二

近世哲學が新教初代の神學に及ぼせる影響。神學者等が哲學を尊ぶの度。六三三—六三八

第五期、過ぐる二世紀間哲學思想の豊盛なりしこと。ライプニツ先代の哲學を以て満足せず。氏がロッキングの感覺教に反對する方法。氏の原子論、スピノザに與ふる消毒藥。氏の預定和合の説並に其自由及び樂天説に有する關係。氏の天啓宗教に對する感情。フォルツライニツの哲學を變更す。九四二—九四九

ハークリー觀念論を経験教と結付く。氏の觀念を引き來れる方法並に其万有に關する思想。九四九—九五一

ヒュームの懷疑說に含有せらるる四點。ヒュームの宗教に對する有様は全く破壊的なるもの疑問。九五二—九五五

スコッチ哲學者、ヒュームの懷疑說に反抗す。其教理上の類似。九五五—九五六

英國及佛國に於ける極端なる感覺教の代表者。佛國に於ける感覺教の反對者。クローザンの折衷說。九五六—九五七

カントがヒュームの懷疑說より受けたる刺衝。カント自ら其純全道理の批判に於て任せし事業。氏が經驗教並に獨斷教の上に置きたる制限。純全理性並に實驗理性の上に各歸したる範圍。氏の説と聖書の教の異同の點。九五七—九六四

フヒクテはカントの哲學を補充せんとす。氏の吾人外

界の印象を受くるの理を説明する方法。氏の初期の哲學と晩年の哲學との異なる點。教理上の事に關して氏の哲學とカントの哲學との差違。氏の基督教の大真理を保存せんとするの度。……………九六四—九七〇

シェリングの哲學發達の教段。フヒクテを去るの點。氏の絶對並に之を知るに至る方法に關する説。氏の晩年の説は其初期の説と異なる。氏の哲學は詩の如し。……………九七〇—九七四

正統教會の思想と反對の點。氏の俗合理派に對する感情。……………九七〇—九七四

ヘゲル、哲學の適當なる目的並に此目的に達し之を解説する方法。哲學の三科目。思想進化の發起點並に其階段。氏の哲學の基督教神學に對する形式的の狀貌。氏の主義並に其の弟子の判定せる其眞實的關係。……………九七四—九八四

ヤコビ及びシフライエルマヘルの哲學の特點。シフライエルマヘルがヤコビを補充せし點。……………九八四—九八六

マヨウベンホーエル及びハートマンは哲學厭世教の代表者あり。……………九八七

ハートマンの先哲學に對する關係。氏の哲學の眞の方法に關する思想。ロンキの獨斷的觀念論並に物質的に關する批評。ロンキの認識せる觀念論の元素。氏の哲學には有神論的の面重きを占む。……………九八八—九九〇

コムトの實驗論の基本的思想。氏の智識の百科を含有すとさせる六科目。氏の新宗教。……………九九一—九九二

近代英國感覺教の代表者。彼等の一致する點。ハーバード、三スペンサーの進化論。ミル及びスペンサーの記述と宗教上の眞理との關係。……………九九三—九九八

題目見出

基督教神學に關して近世哲學の一般の結果。神學者並

に神學派は夫々哲學と特殊の關係を有す。哲學の價值に關する説。……………一〇〇〇—一〇〇四

第三

著述家、教派信條

第一期、初代三世紀間の著述家の類別。ローマのクレメント、イグネチウス及びシヤステン、コータの著書の眞實彼等の手に成れること。バーナバス及びハーマスの同一に關する思想。タータリアン、ノバチアン、及びピツボリタス等を正當教の神學者として引照するの適當なることアキノピウス及びラクタンシアスを以て定教上の權利ありとする説。重なる著述家等の特質。……………四七—五八四

第二期、アリアス時代の希臘語の著述家。基督論時代の希臘語の著述家。此時期のラテン語の著述家。正統派なるや否や疑はれし著述家。異端家の列に入れられし者の尤

も有名なる人々。希臘教會並にラテン教會中の尤も有名なる著述家。……………一五五—二六一

第三期

「スコラスチズム」なる語の意味。第三期を小別して四時代とす。各代の特質及び重なる著述家。學校及び大學校。煩瑣學派の價值。玄奧教の價值。……………四五七—四七〇

第四期

新教一致の状態。第一の分離の原因。ポリアル派並に改革派の特質。英國教會を以て改革教會の一派となすの適當なること。英國教會と改革教會との異なる特點。又爭論及び分離の原因。……………六三九—六四二

惟一派の代表者諸所に散見す。フホスタス、ソシナス惟一派を組織す。此時期英國惟一派を代表せる重なる人々。……………六四二—六四四

アーマニアン派和蘭に生せし有様。アーマニアスの外部の幸運。アーマニアス及び其繼續者の間に存する教

理上の差違。

メノナイト派の興起。彼等の信仰及び實行の特異の點。……………六四五—六四七

英國浸禮教會の建設。ローザリ、キリアム、及び米國……………六四七

に於ける第一の浸禮教會。初の浸禮派の教理上の立場。及び其後生ぜし諸派の教理上の立場。……………六四八

友愛派即ちクイッカー派の起原、及び其尤も有名なる代表者。……………六五〇

信仰簡條及び其他教理を代表する記録の表。アウガスホルグ信條、スマルカド信條、コンコルドの誓書、……………六五〇

ハイデルベルグ問答書、第二ヘルベツク信條、ドルト議會の告文、三十九簡條、ウキストミンスター信條、……………六五〇—六六一

ラコピアン問答書、ドレント議會の決議及び告文等の註。十七世紀の希臘教會の信條。……………六五〇—六六一

此時期の著述家の表。……………六六二

ルイテル教會神學はルイテル及びメランクトンの兩人

より來る。十六世紀の他のルイテル派の學者。十七世紀のルイテル派の學者。……………六八六—六八八

改革派神學又はツヰングリ及びカルピンの兩人より來る。其後スキツラランドに起りし有名なる諸學者。和

蘭に於ける代者表。アーミニアン派の重なる代表者。佛國の改革派學者。大英國の諸教派の有名なる學者。……………六八八—六九一

天主教會の尤も有名なる學者。……………六九三

十六世紀のルイテル教會爭論の概略。十七世紀の二大爭論。ルイテル教會の玄奧派。……………六九三—六九九

アマツウ及びブラケアスの説の爲に改革教會内に起れる激動。改革教會内の玄奧派。……………六九九—七〇〇

ゼシユエト派及びツヤンセンスト派との間の争論の起原及び性質。天主教會の純一を欲くが如し。天主教會の玄奥派。……………七〇一—七〇四

第五期、

モラピアン派の興起及び其教理上の特質。……………一〇〇五  
メソヂスト派及モラピアン派の初めの關係。メソヂスト派と英國々教會との關係。其神學はアーミニアン派ありと云ふ意。其教理上の立場及び其學者。……………一〇〇六—一〇〇九  
新エルサレム教會。其開祖並に其開祖の地位。……………一〇一〇  
十八世紀及び十九世紀の英國の唯一派。新英國唯一派の發生。其生長の諸段。各段の重なる學者。唯一派と多少類似する所の諸派。……………一〇一六—一〇二七  
「モルモン」宗を特に論せざる理由。……………一〇二八  
ルーテル教會近代の發達。合理派の起源及び進歩。合理派に對する反動。正統派と云ふべきルーテル派學者……………

の表。一致の企圖。合衆國のルーテル派の教理上の有様。……………一〇一八—一〇二四  
大陸改革教會神學上の隆替。福音主義の尤も有名なる代表者。合衆國に於ける類似の諸派。……………一〇二四—一〇二五  
英國自然神教の争論。福音派の興起。「トラクターリアン」派。廣教會運動。……………一〇二五  
合衆國監督教會の設立。其初めの傾向。英國其後の運動より受けたる影響。……………一〇二七  
スコットランドの長老派。其境内に分離者の起原。近代の學者。合衆國の長老派。舊派及び新派の區別。殊に大切なる著書。……………一〇二八—一〇二九  
英國組合派、新英國組合派の大切なる運動はジョナサン・エドワードより始まる。エドワード及び其繼續者等……………

が舊時の神學に改良をせしたりと云ふ點。新分離と呼

ばれたる運動の特質。千八百八十四年の信仰箇條。

一〇二九—一〇三二

十八世紀の浸禮派の運動。其現世紀の繁榮。之を代表する信條及び學者。

一〇三三—

近代の天主教會内の自由主義運動の狭き範圍。バネカ  
ン議會の法王無上權説の勝利。舊主義の運動。信條様  
の記録の附加。有名なる記者。

一〇三三—一〇三五

近代希臘教會の保守的の傾向。尤も大切なる近代の信  
條。

一〇三五

第四 聖書及び傳説

第一期、

使徒の直後の時代に於て聖書ある語の意味。初代基督  
教徒の内には舊約書の定限未だ決せず。真正の定限を  
定むる勤勞。希臘教會並にラテン教會が終になしたる

決定。五 五—五 八

新約聖經を定限せんとするの刺動力。新約書の大部は  
初代一般に承認したりとの證據。幾分か疑はれたる書。  
現今の聖書の一般に承認せられたる時日。正經内に包  
有せられざる書。五 九—六 三

靈化の説は猶太教より遺傳し來る。尤も初代の基督教  
徒の説。モンタン派の説。モンタン派興起の後基督教  
徒の取りたる説。六 四—六 八

釋義學上の原則。初代基督教徒の解釋の一大誤謬。俗  
人も自由に聖書を讀むを許されたるの證據。六 九—七 一  
新約書未だ編成せられざりし時は傳説重きを占む。編  
成せられし後聖書と傳説との關係の説。秘密傳説の説。  
七 二—七 八

第二期、極端なる靈化説の證。人間的の元素を認めたるの例。

題目見出

モンタン派の説に對する感情。……………二六二—二六四  
 解釋法の進歩。尙寓意的解釋法を取る者あり。俗人聖  
 書を読むこと許され又行はる。……………二六五—二六六  
 聖書と傳説の關係に就て一般に行はると説。………  
 及びナツアンゼンのグレゴリーは幾分か例外あり。眞  
 正なる傳説の配表及び傳説の憑據を尊ぶに至れる原因。  
 秘密傳説。……………二六八—二七四  
 第三期、先代と中世の靈化説及び解釋法の比較。アクイナスの  
 天啓必要論。煩瑣學者が理論上と實際上聖書に與へた  
 る地位の區別。ウィックリフ並に他の改革者等が聖書  
 に與へたる地位。傳説の代りに教會の權力を重ずるに  
 至れる傾向。教會の無誤の權は何處にあるやの問題。  
 ……………四七一—四七五  
 聖書を俗人に禁ぶたる度。……………四七八

第四期

聖書と傳説との問題に關して新教と天主教との差違の  
 点。……………七〇五  
 聖書の正經及び憑據に就てトレント議會の議論並に決  
 議。傳説に關するトレント議會の告文。ペラーミンの傳  
 説に關する持論。ペラーミン及びボスモアの語中に含  
 有する傳説の証標。ペドロ、ズントの記述。聖書解釋に  
 關するトレントの告文。天主教が聖書と教會の權力と  
 に附したる位置。……………七〇六—七一三  
 希臘教會の正經並に傳説の憑據に關する説。……………七一三  
 正經、憑據の譯書、傳説の職、教會權力と聖書の關係  
 等に付て新教の立場。聖書の神出の證として尤も重じ  
 たる者。新教者の主張せる他の証據。クイカー派が聖  
 書の主權を制限せし由由。……………七一四—七二五  
 天主教會の諸派の主張せる靈化に關する諸説。……………七二六

ルイターの靈化説。ルイター派中に流行せる説。……………

七二七—七二八

ツ井ングリ、カルピン、及び改革教會の大躰の靈化説。

ハックストルフ及びヘルベテック一致誓書の希來伯聖書  
の母音點に關する説。……………

七三〇—七三二

米國著名の學者、ソニアン派及びリチャード、バック  
スター等の靈化説。……………

七三二—七三四

十七世紀よ於ける聖書を講ずる方法。……………

七三四

溯源批評の始、英國自然神教派、スピノザ及びリチャ  
ード、モモン等之を代表す。……………

七三四—七三六

第五期

新教者の或る者と天主教者の或る者が近代に至て聖書  
と傳説との關係に付き稍接近したる説を有するに至り  
し理由。ニエーマンの教義發達に關する説。「トラグタ  
リアン」派即ち儀文派は天主教の傳説の說に接近せり。

一〇三六—一〇三九

聖書の靈化に關する四ツの說及び其代表者。天啓と靈  
化との區別。聖書の憑據を信する者も聖書に關して稍  
々制限せる説を取るに至りしこと。……………

一〇四〇—一〇五一

溯源批評は十八世紀の英國自然神教に現はる、獨逸合  
理論の起原、獨逸合理理論唯理論に發達と。審美的合理  
論、ストラウスの小説説、ハアアの發達説、クイナン  
及び、ウエルハッセンの舊約論。……………

一〇五一—一〇六一

溯源批評結局の成果如何。……………

一〇六一

第五

神の存在

第一期、初代師父は眞理は自明自証ありとの説を重す。神の存  
在の証據として尤も信任せられし議論。……………七 九—八 三  
第二期、前代の議論を加へたる新議論。デオドラス、アウガス



チン及びホイテアスの議論。……………二七五—二七七

第三期、アンセルムの實躰論。ガニローはアンセルムの議論を批評す。アンセルムの議論の價値に關する説。煩瑣學者の大体の傾向。トマス、アクリナスの議論。サボンデのレモンドの議論。玄奥派の特に重じたる点。……………

第四期、デカートの哲學興起せざる前第四時期に行はれたる議論。デカートの議論。之を承認せし度。ロツクの論。サムエル、クラーク其空間の説より議論をなす。……………四七九—四八四

第五期、近代に至てアンセルムとデカートの實躰論を認識するの度。カント及びロツクニ實躰論を批評す。神學者の多數の實躰論に對する感情。カント開闢論並に意匠論を批評す。此等の議論尙滅せず。カントの道德論。此……………七三九—七四五

問題發達の歴史を讀で起る處の感情。……………一〇六四—一〇六八

第五

神の本質及び屬性

第一期、神の本質に就ての思想を變化せし反對力。神の超絶を強く主張するの傾向現出す。神の超絶とは必ずしも神に付て適當なる智識を少しも有する能はずと云ふにあらず。神の性質の靈たることを願みざる記述。オリセシが神の力と智識とを制限せる意。神は時間と變化とを超脱す。神の全能と罪を犯す力との關係。……………八四—九三

第二期、

神人同形説。エーノンミアスは神の本質を知るを得べしと唱ふ。正統神學者中の説。神の超絶の極端説を飽くまでも保つことを得ず。神の性質の單純あること。神の時間と空間とに於ける關係。神に罪を犯すの力なしとする理由。希臘教會は比較的に神の道德性に注意す

ること少なし。

二七八—二八六

第三期、

中世神學者等が神の本質を知るを得べしと云ふ説。神

の性質の單純ある事に關して煩瑣學者の説。神は其爲

す處よりも一層多く或は一層能く爲し得るやの疑問。

神の遍在の説並に之を表せし比喩。神の智識の方法並

に其智識の諸形狀。神の無變。神の意志は結局の者な

るや或は基く者あるやの疑問。

四八三—四九一

第四期、

宗教改革時期に於て不可識説に接近する度。神の本質

及び屬性に關しては大赫アウグスタン及び煩瑣學者と

一致する點。ソニニアン派及びア—ミニアン派の或者

が保有したる神の永遠に關する説。神は偶然事件を前

見するやに關するソニニアン派の説。カルビン派の學

者の教もる預定と預知との關係。此關係も付てア—ミ

ニアン派及び其他の人々の説。中間の智識あるや否や

に關する疑問。神の意志は正義の絶對の標準なるや否やの疑問。宗教改革神學は公義の屬性を重んず。

七四六—七五六

第五期、

カントの哲學に於ける不可識説の發起點。シェリング、

及びヘゲルの哲學に於ける反對の極端。ハミルトン及

ヒマンセルの不可識説、並に彼等が之より引きたる實

際上の結論。彼等の説に對する批評。近代に於て神を

知る人の力に付て一般に有したる説。神の性質の單純

なることに關して變化せる説。神の永遠に付ての説。

人間の自由行爲を預知するを得るや否やの疑問。預知

と預定との關係。中間の智識。神の意志と道德の標準

との關係。

第七

三位一體説

題目見出

第一期、神と宇宙との間に中保者あるの思想は宗教思想に必要なり、此思想が推想的の人心に自然占有する所の有様。

九四—九五

フラトリーの觀念説は基督教の「ロゴス」説の準備たるに適す。神學者等の中にはフラトリーの觀念説の中に「ロゴス」の像を見し者あるの證。フラトリーの他の論中に神の身位の複數あるを示す者あり。九六—九七

舊約聖書及び其他の猶太教の記録にも「ロゴス」教理の準備あり。フハイローの取りたる根源。フハイローの描き出せる「ロゴス」。彼は「ロゴス」を有身位者とあせしや否や。ドルナー氏フハイローの「ロゴス」を分解す。フハイローの「ロゴス」教理と成肉及びメツシア降臨の思想との關係。九一—一〇四

「ロゴス」の教理の準備として尤も大切なる者。一〇五

初めて「ロゴス」の教理を組織せんとせし者に對して如何なる望を置くべきか、又斯かる企圖を判断する規則。

一〇六—一〇七

初代教會は衆口一同「ロゴス」の前存を信じたるの徵證。

アセナゴラスの解釋に關して特殊の疑問あり。一〇七—一一〇

初代教會は皆子を以て父と同質の者と思考するの傾向を現せし徵證。異教の批評基督教徒の讚美歌及び信仰の規則等の證。使徒師父等の記述。ヨヤステン、マーター及び其當時の辨證家の記述の特質。アレキサンドリアのクレメント及びアイレニアスの教訓の特質。ター

マリアン及び氏に繼續せる學者の記述の特性。子の神性に關するオリゼンの論。ドルナー氏オリゼンの神の存在の法に關する思想を註解す。アレキサンドリアのテオニシアス及びラクタシアスの説。一一一—一二六

初代教會の學者は後代のナイシン時代の學者等が許さるる程神子の次位説を認識せり。オリセンの系統に於ける次位説。アイレニアス及びアレキサンドリアのクレメントは子の次位説を唱へ過ごせしや否やの疑問……

一二六一—一三一

最初の聖靈論の性質。基督教の生命及び禮拜中に聖靈を認識せらる。聖靈の有心者なるを信じたる證。オリセンの教へたる聖靈の位階。……

一三三—一三六

第二期

アリアス争論の準備。兩黨の強弱。……  
半アリアン派の信条、其兩派を去るの度。……  
神子に關するアリアン派の説。アリアン派の道理並に

二八六—二八九

聖書より引き來れる議論。……

二九一—二九五

ナイシン信条中に記載せる神子論。ナイシン師父等は先代の神學者よりも一層の進歩をなせり。神子發生の

性質如何に付ての説。彼等は神子は充分神父と同一質ありとの意を含みし證據。彼等の許容したる次位説は唯一のみ。アリアン派の形而上學的議論に對するアタナシウス及び其他の者の答辯。アリアン派の聖書の推論に對する答辯。……

二九五—三〇三

アリアン派の聖靈論。マセドニア派神學者の教理、聖靈の有身位あるを拒みし度。……

三〇六—三〇七

信仰箇條及び使徒師父の教訓にある聖靈に關する正統教理。聖靈の神性を證する重なる議論。聖靈發出に關する疑問。……

三〇八—三〇九

ナイシン師父等が神の三身位と其一致とを和合せし理由。正當三位一神説の語法。……

三〇一—三一

アウガスタンの三位説とアタナシアン即ちナイシン三位説との異なる點。アウガスタンの尤も多く用ひたる

譬喩。アウガスタンが神の三身位と其惟一とを調和せんとしたる思想。アウガスタン派を代表する信仰箇條。

第三期

三一一—三二六

ロッセリン及びギルバートの教へたる三位説の異端説。アベラードの譬喩。エクハートの神の身位に関する説。

四九二—四九四

煩瑣學者の尤も用ひたる譬喩。セントウキクトルのリチャードが論じたる神の身位の複數なるは必要ありとする説。

四九四—四九五

聖靈發出に關して東西兩教會の説。アンセルム及びアクイナス各西方の説を贊助す。

四九五—四九六

第四期

アウガスタン風の三位説に對するルーテル派並に改革派の感情。カルピン及び其他の人々の子の自存に関する説。神の三身位と其惟一とを調和するガーハードの

説。十七世紀ルーテル派神學者の説ふよれば三位一躰の教理は實際上必要ありとぞ。……………七五六—七五八  
子及び聖靈の次位説、アーミニアン派並に英國神學者の取る所。……………七五九

サムエル、クラークの「三位一躰に関する聖書の教理。……………七六一  
正當教會の三位説に對するクイカー派の感情。……………七六三  
神子に関するサーベタスの説。……………七六三

三位一躰説に對するソツニアン派の反對。基督の性質、其昇天後の地位、其榮光等に関するソツニアン派の説。……………七六四—七六六  
聖靈に関するソレニアン派の説。……………七六四—七六六

フヨン、ピットルの子及び聖靈に関する説。……………七六七  
ミルトンの子及び聖靈に関する説。ロック及びサー、アイザック、ニュートンが三位説に對する感情如何。……………七六七—七六八

第五期、近代の神學思想中に三位説の占有する地位。哲學上此  
 數理の必要論。神子の永遠發生説の分離者。……一〇七九—一〇八二  
 稍々強き次位説を代表する三位論者。……一〇八三

ンライアマヘルの三位論の解説。スウェーデンホルグの  
 説。……一〇八四

獨逸合理論の發生。……一〇八四—一〇八五

英國及び米國の唯一派の基督の性質に關する諸説。惟

一派の聖靈に關する定義。……一〇八六—一〇九〇

第八  
 世界の創造

第一期、

初代教會は一般に世界は無より造られたりと信ず。タ  
 ータリアン、ハーモセテスを批難す。神の世界創造の  
 意。モーゼの創世の日に關して一般に取りし處の説。  
 此點に關するアレキサンドリア師父等の説。オリゼン

第二期、

は神の創造力は永遠より働きしとさせる理由。一三九—一四一  
 無より造られたりとする説に對する地位。アウガスタ  
 ンはオリゼンの世界創造は永遠よりありとの説に答ふ。……  
 物の本質の創造と其成形との區別。アウガスタンは創  
 造と保存とを同一視せり。創造の日に關して一般に取  
 る所の説。創造者の事業に害惡の存するを説明す。……

第三期、

無より創造の説に關して煩瑣學者の一般に取る所。ア  
 クボニス及びプリンス、スコトスは煩瑣學者一般に取る所  
 の説の理由を附す。名目論者及び實驗論者の立場異な  
 るより其世界創造の思想も亦異なる。エリゲナ、及び  
 エクハルトの説は例外あり。創造に用ひられたる時間  
 幾何。……四九七—四九九

第四期、

天地創造に關するジョン・ミルトンの説は例外なり。創

造と保存との關係如何。創造に用ひられたる時間。ア  
ダム以前人類生存説現はる。……………七六九—七七〇

第五期 無より創造の説を變更せんとする傾向生ず。創造に於  
ける神の自由に關する問題。創造と保存との間の區別  
の度。モーセの創造の記録に關する諸説。……………一〇九—一〇九四

第九 天使及び惡魔、

第一期、墮落せざる天使に關する説。天使に有躰的の性質を附  
するの傾向あり。……………一四二—一四三  
サタン墮落の原因、諸師父の説一方にあり、ラクタン  
シアスの説他方に對す。他の惡天使墮落の原因。惡魔  
の起源。……………一四三

善天使は諸方に其力を働かす。惡天使の力。ツプリア  
ンの天然の善惡の説明。師父等は天使の力を適當に制

限せり。……………一四四—一四五  
初代教會は天使禮拜の實效を許容したるや否やの疑問。

第二期、天使の有躰に關して諸師父の説。偽デオニシアスの説け  
る天使の階級。……………一四六  
アウガスタンは墮落せざりし天使に永劫保存の恩賜を  
得たりと云ふ。……………三二二—三二二

創世紀六〇—二—四の新解釋。……………三二三  
善天使及び惡天使の力に關する説。……………三二四

第三期、天使禮拜の實效許容せられし度。……………三二五  
天使躰を有するや否やに關する中世神學者の説。天使  
論に關する奇怪なる疑問。天使の類別。……………四九九—五〇〇

第四期、初めの新教神學者等は天使に有躰的の要素あるを唱へ  
り。此點に關する天主教一般の立場。ルーナル、及び

第五期、

カルピンの唱ふるサタンの力に關する説。……………七七〇—七七一  
 天主教并に新教者が近代に至て天使の躰云々に關して  
 取る所の説各如何。スウエデンボルグは凡ての天使は  
 本と人なりと唱ふ。惡天使に關して獨逸合理派最後の  
 感情。此問題に關する反對の潮流。……………一〇九七—一〇九八  
 第十

人間論

第一期、

アダムに歸せられたる比較的の超越。人間中にある神  
 の象と像との區別。墮落以前人間の住居。二重性論並  
 ふ三重性論。靈魂は純全たる無躰あるや又自然不滅な  
 るや否やの疑問。直造説並に受傳説。前存説。……………一四六—一五四  
 墮落の記録の解説。アダムの墮落と人類との關係。其  
 罪惡の結果の遺傳。等に關する消極的の説。墮落の結  
 果に關する積極的の説。初代教會一般の立場は比較に……………一四七—一五三

第二期、

依て説明せらる。第一の罪惡に對して宣告せられたる  
 死罪に關して一般に取りし處の説。……………一五五—一五九  
 罪惡の性質に關して諸學者等の説。……………一六〇  
 人間中にある神の像と象との區別に關する一般の説。  
 樂園の記録に附したる二重の意味。二重性論並に三重  
 性論。靈魂の自然不滅の教理に關して一般に取る所の  
 説。靈魂は純全たる無躰あるや否やの疑問。直造説及  
 び受傳説孰れを取るや。前存説。……………三二六—三二九  
 墮落の性質に關する正當教の説。墮落の結果に關する  
 諸説は尤も此時期に著し。……………三三〇  
 墮落の結果に關して希臘教會人間論の立場。……………三三一  
 希臘教會並に初代ラテン教會の人間論の重なる差違。  
 ペラジアン爭論の前にはラテン學者等はアウガステン  
 の立場に立たざりし証據。此時に於けるアウガステン……………三三二



自身の立場。.....

三三三—三三五

ペラウアン争論の外部の歴史。ペラウアスの宗教上の  
経験は其持説をなすの要素とされり。彼が出發せる理  
論上の立場。彼がアダムの罪の結果として後世人類に  
傳はりし者は惟一のものと唱ふ。其罪の結果の傳遞すべ  
き惟一の途。自由意志の本性。道德性の發生に關する  
思想。彼が人間の自然力に關する思想並に其恩寵に歸  
したる範圍。彼が其人間の自然の状態に關する思想を  
可とする説。.....

三三五—三三九

アウガスタンの宗教上の経験と其持説との關係。アウ  
ガスタン派及びペラジアン派兩者の發起點、精神、目  
的共に異なる。アウガスタンがアダムの本源の状態に  
關する説。彼が自由の本性に關する説。アダムには反  
對選擇の力ありとする事を解説す。アダムの罪の解釋。

アダムの犯罪の自身及び其子孫に及ぼせる結果。新生  
者の子供の腐敗を解説す。彼が其原罪論を証する聖書  
の証。.....

三四一—三四八

半ペラウアン派の起原並に其重なる代表者。其ペラウ  
アン派並にアウガスタン派と異なる點。.....

三四九

中和アウガスタン派オレンヲ侯之を代表す。其半ペラ  
ウアン派並に正當アウガスタ派と異なる點。其後來  
の教會に同情を得たるの度。.....

三五〇

罪に關する消極的の説流行せし度。肉躰と惡との關係  
に就ての説。アウガスタンの特に主張せし罪の性質。.....

三五一—三五四

第三期、  
神の象と像とに關する煩瑣學派の持説。本源の正義及  
び其賦與の時。「パラダイス」の地位。アダムの「パラダイ  
ス」に住せる時間、アペラードの説。人間の性質の區別、

靈魂無軀的の性質、其自然不滅等ハ關する普通の説。  
直造説及び受傳説。……………五〇一—五〇六

ユリゲナの墮落の話を解説する法は例外あり。墮落の  
結果に關する希臘教會の教。此問題に關するラタン教  
會一般の傾向。……………五〇六—五〇七

原罪の性質及び其遺傳の方法に關する煩瑣學派の説。

形式的自由及び眞實的自由的を承認するの度。……………五〇八—五一四

墮落の自由意志に及ぼせる結果に關してアウガスタンの  
説に密接する者の例。又此點に於てアウガスタンを

脱離せんとする者甚だ多し。……………五一六

煩瑣學者の道德的害惡の定義。害惡と宇宙の完全との  
關係に付ての説。……………五一八—五一九

第四期

墮落以前のアダムの秀逸に關する諸説。本源の正義に  
關する天主教の説。神の象と像との區別に關する説。

ルター派並に改革派神學者の説之に反す。……………

ン派及びアトミニアン派の神の象の解釋。二重性説寧

ろ行はる。靈魂は純然無軀ありとの説を脱離するの例。

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

モリナ徒のラエニユイト派及びユージェニタスの勅書等の持説。人間の自然力に關する天主教の教理發達の概略。

七七八—七八七

初代のルーテル派中には永く承認を得べからざる説を取るの傾向あり。ルーテル及びメランクトンの記述は論理的に神の定命の免る可らざるを合む。メランクトンの後年の教、ルーテル派の此問題に關する異説。ルーテル及び後年のルーテル派神學者等が唱道せる自由の意。原罪中に含有する元素。原罪の連累は直接か間接か若くは兩方か。原罪の遺傳を説明する爲み受傳説を採用す。マタイアス、フラスシアスの説攻撃せらる。ルーテル派神學の墮落せる人類の無力を主張する度。

七八八—七九三

神の定命及び力と墮落との關係に付てツキングリの教。

カルビン、ベールザ、ゴマー及び其他の説。ウエストミンスター信條の記述、及ウキリアム、カンニングハムの解説。改革派の神學中にある人間自由の意、神の罪惡の責任を負ふべきや否や、原罪に關するツキングリの説は例外なり。ジエレミー、テロフア同説を取る。改革派一般に唱道する原罪中の元素初。代改革派は直歸説を教へしや否や。後年此點を決定す。原罪中の罪科の説明。廢敗の遺傳の説明。墮落せる人間の道德上の無力に關して改革派の定説。英國には改革派の稍々變更せる説行はる。

七九四—八〇六

アーメニアン派の神の定命と墮落の關係に付ての説。アーメニアス及び其他の人々が主張せる偶然事件の説。アーメニアン派の自由の定義。アーメニアスの從者の主張せる原罪の説。アーメニアス及び其繼續者の間に

は道徳上の無力説に關して異なる説を抱けり。クイック  
カー派の原罪の説。……………八〇六—八一一

ツミニアン派の説、墮落の偶然事件なることに關し、  
自由の性質に關して、アダム派及び其子孫に及ぼせる  
墮落の結果に關して。……………八一—

第五期、天主教内及び新教内に於ける罪の定義。……………八一—  
アダムの本源の状態如何に關して近代一般の傾向。本  
源の正義に關して天主教の説。聖書中の「バラダイス」の  
話の解説。靈魂二重性論を取る神學者。又三重性を取  
る解説。靈魂の無躰あるを否定するの例。身位不滅の  
議論。直造説及び受傳説の撰擇。兩説并唱する者あり。  
靈魂前存説を取る者。……………一〇九九—一一〇六

非カルビン派の神旨と墮落の關係に付ての一般の説。……………一一〇六  
近代のカルビン派中に「インフラ、ラプサリアン」説を取る

者の傾向。カルビン派の用語中にある「許容的命令」なる  
語の意味如何。エドワード派中のホップキンス流の人……………八  
々の説。ニユー、ハブン派ホップキンス派を批評す、ニ  
ユー、ハブン派の立場は如何。此問題に關してハンネス  
ナルジの説。……………一一〇七—一一一一  
自由及び責任に欠く可らざる條件に關して非カルビン  
派一般の説。ミニョラー及びホイドンの説、リード、デ  
ユーガルド、ステワート、サー、キリアム、ハミルトン及びカ  
ント等の自由の説。……………一一一一—一一一六  
カルビン派の自由の定義。エドワードの説。氏の reduce-  
tio ad absurdum. 小エドワード、ホップキンス、エムモンズ、グ  
リフヒン及びウィーツ等の説は必然論に傾く。東キンド  
ツア及びプリストンの説はローレンス及びアトワード  
に之を代表す。エドワード派の責任説を取る者他にも……………

亦あり。ホッヂの責任論。……………一二一六—一二三三

近代の新英國神學者等はエドワードの自由責任説を變  
更す。オベリンのフビンチーの説。……………一二三三

天主教内にも其教會の原罪説を脱離する者あり。……………一二三三

原罪は罪科の分子を含むや否やの疑問に對してル  
タル派改革派及び「メソヂスト」派の答。「ユニタリアン」派  
の原罪の説。……………一二三三—一二三五

原罪中の罪科の分子を解説せんとせる諸説。腐敗遺傳  
を説明せんとする諸説。エムモンスの新説。……………一二三五—一二三七

自然の人の道德上の無力に關してル<sup>イ</sup>タル派の説變更  
せり。此問題に關して舊派カルビン派の説。新英國派  
の呈出せる區別。メンヂスト神學に於て人間の自然無  
力を唱ふるの度。……………一二二八

罪惡の起源及び性質に關して近代神學者の諸説。罪惡  
……………一二二八

と宇宙全体の善との關係に付ての諸説。……………一二二九—一二三二

第十一

基督の身位

第一期、初代基督教の文學中に普通に顯はれたる基督の容貌。

基督は眞實の躰を有せしと主張せし所以。アレキサン  
ドリアのクレメント及びオリゼン等が唱へし基督の肉  
躰の特性。初代師父中には基督の道理的靈魂を有する  
を拒みし者あるやの疑問。永遠成肉の説。……………一六三—一七〇

第二期、  
アレキサンダリアの學校とアンテオケの學校との關係。……………  
之を支へん爲の議論。此説遂に批難され野せらる。……………  
……………三二五—三五七

アレキサンダリアの學校とアンテオケの學校との異ち  
主張したる度。ヒラリーの著しき思想。……………三五七—三五八

る立場は遂にテストリアン争論の基とされり。キリスト  
 リアス攻撃の直接の原因。其直接の結果はエペソの會  
 議及び其信仰箇條に依て見るを得べし。……………二五九—三六一  
 ニーテケスの説及び之に由て生じたる事件。……………三六一—  
 三六二  
 モニセドンの會議の基督論。諸派別々にチャルセドンの  
 信仰箇條を解説す。……………三六二—三六三  
 基督論争論の終。此争論の紀念として存する諸小派。……………  
 三六三—三六五

第三期、希臘教會のチャルセドンの信仰箇條の解説はダマスコ  
 のマキムノ之を代表す。……………五二一—  
 五二二

西方の基督論は養子論の準備をせり。養子論の重なる  
 代表者、及び其覆没の事情。養子論の特性。之を支  
 ゆる議論、及び之に反する議論。養子論争論の後西方

基督論の傾向。……………五二二—五二五  
 虚無説、ペテロ、ロムバード。……………五二六—

第四期、  
 「コムニニカチオ、イデオマタム」の教理を信するの度。……………五二七—  
 ルーテル派の「コムニニカチオ、イデオマタム」の教理。  
 之に對するメランクトンの感情。コンコルドの誓書の  
 決せんど欲せし争論。キユーピンゲン及びギイセン神  
 學者の一致せし點及び異なりし點。……………八一五—八一七

ルーテル派基督論に對する天主教の感情。天主教神學  
 者の説。諸派異議の表。……………八一八—八一九  
 近代に至て正統派以外にある基督論。近代には殊に基  
 督の身位論を重するの風あり。……………一三三—一三六

第五期、  
 トマッオス、ゲス、エブラード等は「ケノシス」の教理を  
 發達す。ドルナーは「ケノシス」の教理を更へたり。グッ  
 ドホンの説。「ケノシス」の教理と舊時のルーテル派の基

督論との關係……………一三七一—二四一  
基督の人性前存説……………一一四二

第十二

基督の贖罪事業

第一期、初代教會一般に基督の事業を如何に解説せしや。初代  
師父が一般に信せし諸點……………一七一

アイレニアスはサタンが贖罪の代金を受けたりとの説  
を取るや否やの疑問。オリゼンの説。オリゼンは他の  
点をも重じたりと云ふ證據……………一八〇—一八四  
基督陰府に下りしや否やの問題。又其處に爲し玉へる  
事業如何ん。陰府下降の教理初めて教會の信條中に入  
りし時……………一八五—一八六

第二期、

希臘教會中ふてサタンの權利説及び贖金を拂ふの説を  
承認したる者の例。希臘教會にて此説を取る者の度……………

ラタン教會にては此説の一面をのみ受け入れたり。ア  
ウガスタン、大レオ、大グレゴリー等の説。サタンの  
權利に關する彼等銘々の説……………二六六—三七〇  
希臘教會並にラタン教會に於て基督の贖罪事業を種々  
の點より見たり。アウガスタンは基督の道德上の感化  
を殊に重じたり……………三七二—三七三  
陰府降臨の説。人間を救ふの途は只一あるのみなるや  
或は又他にも途あるや……………三七五—三七七  
第三期、アンセルムの贖罪論。氏はサタン權利説を却けたり。  
氏の贖罪論は神に對する義務の思想より發す。贖罪の  
必要、其適應の理、其行はるゝ方法等に關する説……………  
五二八—五三一

アベラードの説。他の煩瑣學派の主張せし點、及び彼  
等がアンセルムを脱離せし點。此脱離の頂點はドンス……………

題目見出

第四期

スコトスに於て見るを得。……………五三三—五四一

天主教會にては中古時代の諸説中何れを取るや。……………八二〇

ルテラル派並に改革派の説のアンセルムの派に接近するの點。彼等の説のアンセルムの説と異なる點。ピスカトア、テロットソン及びバックスター等の説。……………

……………八二〇—八二六

ヒニーゴ、グロシアスの律法に関する思想、並に此思想の贖罪に適用せられたること。アーメニアン派の重なる者がグロシアスと一致せし點、並に彼等が之を變更せし點。……………八二六—八二九

……………八二六—八二九

ソニニアン派の神の公義に関する説。ソニニアン派の認識せる基督の事業。彼等が基督の死を以て贖罪の犧牲ありとするの意。彼等が代理的償還説に反對する點。……………八三一—八三四

……………八三一—八三四

……………八三一—八三四

……………八三一—八三四

……………八三一—八三四

……………八三一—八三四

……………八三一—八三四

……………八三一—八三四

……………八三一—八三四

……………八三一—八三四

……………八三一—八三四

……………八三一—八三四

……………八三一—八三四

……………八三一—八三四

……………八三一—八三四

……………八三一—八三四

……………八三一—八三四

……………八三一—八三四

天主教ルテラル派及び改革派の神學者が論じたる陰府降臨の説。……………八四一

第五期、近代の贖罪論數多あり、其各派の主唱者、基督の起働的從順は其贖罪事業の一要素たるや否やの問題の決定。……………一一四三—一一五四

……………一一四三—一一五四

……………一一四三—一一五四

……………一一四三—一一五四

……………一一四三—一一五四

……………一一四三—一一五四

……………一一四三—一一五四

……………一一四三—一一五四

……………一一四三—一一五四

……………一一四三—一一五四

……………一一四三—一一五四

第四期

……………八二〇—八二六

……………八二〇—八二六

……………八二〇—八二六

……………八二〇—八二六

……………八二〇—八二六

……………八二〇—八二六

……………八二〇—八二六

……………八二〇—八二六

……………八二〇—八二六

……………八二〇—八二六

……………八二〇—八二六

……………八二〇—八二六

……………八二〇—八二六

……………八二〇—八二六

……………八二〇—八二六

……………八二〇—八二六

……………八二〇—八二六

……………八二〇—八二六

……………八二〇—八二六

……………八二〇—八二六

……………八二〇—八二六

……………八二〇—八二六

……………八二〇—八二六

……………八二〇—八二六



救を得るには信仰の最大必要ありとしたると。「稱義」なる語を用ひたる意味。信仰の性質及び其智識との關係に付ての説。信仰を以て恩寵を得るの唯一の方法となすに反し稍外部の者を重するに至りし傾向。……一八九一—一九三

第二期、

人間の自由の方と神の撰擇の恩の問題に關しての教會普通の説はアウガステンおよび其教訓に感化せられたる人々の説と異なるアウガステンの教理、神の專權の撰擇に關して、其或る者を撰むで或者を撰まざる理由に關して、撰まざる者の内にあらんには新生の外の恩寵亦かる可らず、撰まざる者の數、神の意旨と撰まれざる者との關係、氏の撰擇説の聖書の證。預知及び預定に關するアウガステンの説。……三七五—三八一

「新生」及び「稱義」なる語の意味。……三八二

信仰の性質及び其智識との關係に付てアウガステンの

説。……三八三

救を得るに信仰を以て最大必要とすの説に反するの

傾向。……三八五

第三期、

希臘教會の所見はダマスコのジョン之を代表す。……五四二

ゴッドシヨークの教へたる二重預定説の爭論、並にフラン教會のアウガステンの説に對する感情。ゴットマヨーク及びアレキサンダー、ヘールスの間の神學者の議論。トマス、アクリナスの預定論。極端なる預定説に反對するの傾向、ブラドワードン及びサックリフの説。……五四二—五四九

煩瑣學派の「新生」及び「稱義」の定義。煩瑣學派の確證の

教理はトマス、アクリナスの記載する所となる。信仰の

性質に關する説。……五四九—五五一

煩瑣學派の功德説並に赦罪券の徳。……五五一

聖人禮拜の説。處女マリアに關する一般の説。處女の無罪受胎説に關する神學者等の立場。マリアの尊敬。キツクリフの聖人禮拜論。……………五五六—五六〇

第四期、

初代の改革者はアウガステンの立場に歸らんとするの傾向ある所以。……………八四二

天主教内の預定説。法王の勅書及びトレントの決議と此問題との關係。預定命令の遂げらるる方法に關する諸説。……………八四三—八四九

ルテラルが後年に至て其預定説を制限せる方法。ルテラル派の信仰箇條及びルテラルの神學者一般の取る所の立場。クイン斯塔ッドハルテラル派の預定説の梗概を記す。ルテラル派の此教理とコンコルドの誓書の宣言との間の不都合。ホラスの與へたる悔改と新生の定義。……………八五一—八五六

第五期

改革教會中には預定説重きを占む。ツキングリとカルピンの間の差違。カルピンの預定説はアウガステンの預定説よりも一步を進めたる點。カルピンの立場。ビーザ及び他のカルピン派の議論。尤も明白に預定説を記述せる信仰箇條。贖罪の範圍。アミーフウ等の贖罪の範圍に關する説。預定命令の順序に關する二説。カルピン派の悔改に關する説。……………八五七—八六四  
アミニアン派が專斷預定説に反對せる點。同派の預定説の批評。同派の説英國教會内に擴張す。クイツカ派は恩寵の萬民に及ぶの説を取る。……………八六五—八六七  
天主教會の稱義論を知るの根源。此問題に關するトレント議會決議の大要。ペラーミンの稱義論。禮典を重じたる度。信仰の性質に關する論。善行の職。……………八六八—八七三

ルーツアルの只信仰に由て義とせらるゝと云ふ教理の意味。義とする信仰の意味。ルーツアルは善行を其適當なる範圍内に信仰したりとの証。……………八七四—八七五  
 新教者の内に尤も行はれたる稱義論。オツアングター、或るアーミニアン派の人、監督ブル、ゼレミー、ターロア、及びクイッカー派の諸説。……………八七七—八八〇  
 救の確証に付て天主教會の説、改革家の説及び後代の新教者の説。……………八八一—八八二  
 十六十七世紀には人は此世に於て全く罪を脱するを得るの説を取る者多し。アーミニアン派及びクイッカー派は例外なり。天主教の特説よりの推論。……………八八三—八八四  
 天主教がアウガスタンの預定説を受け納れたるの度。モトラリーの記述。……………一一五六—一一五七  
 近代のルーツアル派及び獨逸改革派の極端なる預定説に

第五期、

對する傾向。ハライアマヘル及びローセの此問題に關するの説。ローセ、ニツチ、マルタンセン等の保存説。……………一一五八—一一六〇  
 スコットランド及びアメリカの長老派中にカルビン主義の極端を代表する者。……………一一六〇  
 新英國派の預定説、贖罪の範圍、新生、真理の新生に與かる力等の説。……………一一六三  
 メソヂストと預定説、其贖罪の範圍説、萬民に及ぶ恩寵。合力説。新生の意味。真理の新生に與かる力は如何。……………一一六五

順序に關する諸教派の説。稱義には數元素を含むや否やに關してカルビン派普通の説。此問題に關するサムモンズの立場。ウヰスレー及びメソヂスト神學者の立

場。義の遷着、及び信仰を義とせらるゝの意義に關してウキスレーの解説。……………一六六一—一六八

新教一般の稱義論に對する例外、英國の儀文派、シラ  
イアマヘル及び獨逸神學者、エフデ、モウリス、ホレー

ス、ブシネル、エリシヤ、マルホルド、ホツヂが皮相合理  
派の稱義論の評論。……………一六九—一七二

確證は義とする信仰の本性なるや否やに關して近代一  
般の傾向。ウキスレーの確證の教理。之に對する例外。  
……………一七三—一七四

基督教徒の完全説を唱ふる法メソヂスト派の中に種々  
あり。ウキスレーの定義。オペリン神學のウキスレー  
派と異なる點。……………一七五—一七六

第十四、……………  
教會論……………

第一期、「公教會」なる思想及び名稱の起源。初代の師父が教會に

連るを以て教に必要なりとしたる度。見るべき教會と  
見る可らざる教會とを區別したるの度。監督の地位、……………

ロマ監督の地位。……………一九九—二〇二

第二期、教會制度に至るの傾向。アウガスタン及び「ドナタスト」  
派の教會の定義。見るべき教會以外にも教を得べきや  
の問題に付てアウガスタン等の説。ロマの監督の地位  
及教理上の権力は殊に總會議の記録に依て知るを得べ  
し。……………三九一—三九四

第三期、法王政治全盛の時代。フランス基督教國に行はるゝ教會  
論。法王自身の特權の定義。法王の位に關する此時期  
の初めの神學者の説。煩瑣學派全盛時期の説。コンス  
タンスの議會は總會の権力を重す。ウキックリフの祭  
司政治論。重かる煩瑣學者の教會論と心靈上の壓制主

義との關係。第四ラタン議會の決議。……………五六一—五六六

第四期、ペライミンの教會の定義。氏の教會と死刑宣告の權との關係に付ての説。氏の信仰自由を許すに付ての説。氏が法王に歸したる特權。ゴール神學者の説を取る者の尤も著しき例。……………八八七—八九二

新の教者の教會の定義。見る可き教會と見る可らざる教會との區別。新教者の寛大主義の理論と其實行との撞着。十七世紀寛容主義の進歩。新教者の思考したる基督教の祭司職並に教會政治。新教者の天主教會に反對する調子。……………八九二—八九九

第五期、教會の性質に關して近代新教者一般の思想。高教會派と廣教會派との反對。教會と國家の關係。……………一七九—一八〇  
千八百六十九年、七十一年のバカン議會は法王無上權説及び無誤説を決議せり。法王無誤説の範圍。此説を

辯護する議論。……………一一八〇—一一八三

ペロトンは天主教會外にも救あるを得べしと唱ふるは奇らしき議論あり。……………一一八四

第十五 禮典論

第二期、禮典一般に關する説……………二〇三

第二期、初代に於て禮典なる語を用ひたる意味。……………二〇三  
アウガスタンの禮典の定義。僞デオニャアスの書中の禮典の表。……………二九五—二九六

第三期、煩瑣學派の禮典の定義。禮典の恩寵と視るべき表徴との關係の付ての諸説。恩寵の働きと人の状態との關係に付ての説。禮典の數を決せんとするの傾向。……………五六六—五六九

第四期、トレント議會の決議したる禮典の數、其必要、其働きの法、及び其有效とあるは執行者の意向に關係あると等

の説。ペラーミンの説。ペラーミン等の僧侶の意向に  
關する説。……………九〇〇—九〇三

禮典の數に關する新教會の説。禮典の必要に關する諸  
説。禮典に關する普通の定義。ツサングリとカルビン  
の重んじたる点。ルーテル派の禮典説並に其思想と天  
主教の説との比較。意向説に對する新教者普通の感情。

……………九〇四—九〇七

第五期

ルーテル教會内の合理論者の愛せる禮典説。英國儀文  
派中に存する説。獨逸改革教會の玄奧説。……………二八四—二八五  
天主教會の意向の教理を近代に於て代表する者。……………一一八五

第十洗禮

第一期、初代教會が洗禮を重じたる度。新生の禮典とあせし意  
味。小兒洗禮の實行及び理論。再度の受洗に關する議  
論。洗禮の方法に關する教會の立場。……………二〇四—二〇七

第二期

アウガスタン等が洗禮の有効とあるの原因を説くの説。  
洗禮と伴ふ心靈上の結果。洗禮を受けざる者は救はれ  
ざるや否やに關して諸大家の説。洗禮を受けざる小兒  
の未來の状態。……………三九六—三九九

第三期

洗禮の有効とある原因に關する煩瑣學派の説。洗禮の  
方法。洗禮の結果。洗禮の必要に關する例外の場合。  
……………五七〇—五七二

第四期

洗禮の結果に關する天主教の標準の説。ペラーミン、ニ  
コール、ボスウェー、及びトレント問答書等の受洗せざる  
小兒の運命に關する説。……………九〇七—九〇八  
ルーテル派の洗禮論と天主教の持説とを比較す。ルー  
テル派の小兒洗禮論。……………九〇八—九〇九

改革派の洗禮必要論とルーテル派の持論との比較。改  
革派の洗禮の結果論。改革派の小兒洗禮論とルーテル

派の持論と異なる点。ヘンリー、ドッド、ウエルの奇説。  
ルーテル派並に改革派の唱ふる洗禮の效の續く間。

九一—一九一五

ツシニアン派の洗禮論。「クイッカー」派の説。千六百八  
十八年の「バプテスト」派の信條の記述。メノナイト派と  
浸禮。

九一六—九一七

第五期

洗禮必要論及び受洗せざる小兒の運命に關する新教並  
に天主教の立場。ルーテル教會には洗禮に於て更生する  
の教理發達せり。小兒は洗禮に於て新に生まるゝの説  
に關して監督教會中の諸説明。ウエスレー、ソットン及  
び其他のメソヂスト派の小兒の洗禮有效説。「バプテス  
ト」派の通常唱ふる處の洗禮の職。

一一八六—一一九〇

晚餐禮

第一期、晚餐に關する初代の説を知るの注意。化體説の教理初

代教會にあることなし。晚餐を犠牲となせし意味。

一一〇七—一一一三

第二期

晚餐の意味を過大にせんとする傾向を生ぜし原因。化  
體説は尙教會の准許せる教理とならざるの證。此説を  
取る人ありじや否や。ゲーセラ氏の言。晚餐犠牲説。

三九九—四〇八

第三期

ママスコのジョン及び希臘教會と化體説。ラテン教會  
初めて此説を組成す。此説の初めて受けられたる有様。

此説の教會に准許されし時。其後之を脱離せる者あり。

血肉現實説と一致せざる説。晚餐犠牲説、煩瑣學派の

現實説より生せる實際上の結果。五七三—五七九

第四期

改革時期には晚餐の問題盛に行はる。トレント議會に  
於て定めし晚餐説。メラミンの企圖。九一八—九一九

ルーテル派の晚餐説並に其天主教と異なる点。ルーテ

ル派の思想と基督昇天との關係。眞實現存の方法に關する説。……………九二〇—九二二

九二〇—九二二

ツヰングリの晩餐に用ゆる言の説明並に此禮典一般の説。カルピンの説、並に其流行の範圍。ツヰングリと

カルピンの中間に位せる説。……………九二三—九二六

九二三—九二六

第五期、

ルーラル教會近代の發達。英國教會備文派の説。エブラード、及びチピンの説。新教の他の部分に於て尤も行

はれたる説。……………一一九〇—一一九二

一一九〇—一一九二

他の禮典

第一期より第三期に至る、堅信禮の形式、之を行ふの資格あるものに付て希臘教會とラテン教會と異なり。……………五七三

五七三

懺悔及び抹罪に關する初代の教會一般の説。痛悔禮なる煩瑣學派の教理の發達。赦罪券の職。……………五八一—五八五

五八一—五八五

灌油、聖職、結婚等に關する煩瑣學者の説明。五八五—五八六

五八五—五八六

煩瑣學派の禮典論の價值。……………五八七

五八七

第四期、

痛悔禮に關するトレント議會の告文。懺悔及び抹罪に關するルーラル及びルーラル派の説。此等の点に關する改革派の信條並ぶ學者の説。……………九二七—九二八

九二七—九二八

結婚に關するトレント議會の決議、並に新教の反對の決議。……………九三〇

九三〇

第五期、

ペロリンは死者にも赦罪券の有効なるを説く。……………一一九二

一一九二

第十六

終末學

千福年

第一期、初代教會にはキリスト審判の前に再來して自ら王とあるの教理廣く行はれたるの證據。千福年説衰微の原因。……………二一七—二一八

二一七—二一八

第二期、千福年説の代表者。教會一般の説。アウガスタンの千福年説の代表者。……………六十九

六十九



年期の解説。……………四一一

第三期、千福年説の中世に受けられたる度。……………五八九

第四期、千福年説に對する新教大部の感情。英國及び歐洲大陸の諸大家諸教派の諸説。……………九三三

第五期、近代の千福年論者。セース氏の説。千福年論者も詳細の点に至ては互に異なる。……………一一九三—一一九五

死と復活との中間の状態

第二期、初代師父は中間の世の説を信じたる証。其状態に關する彼等の説。復活以前に陰府を脱去するを得るや否やの問題。煉獄説に近似せる言語及び思想。……………一一〇—一二三

此時期の初に於て一般に取る中間の状態説。煉獄説の發達並に其反動。……………四二—四二二

第三期、煩瑣學派の説、他界に於て諸種の人の受くる直接の運命、煉獄の地理、其火の性質、其苦痛の度及び煉獄の

長さ、等に關する説。……………五八九

第四期、初の新教者の煉獄説に對する感情。彼等が中間の世を認識したる度。死の眠りの説を代表する者の例。……………九三三—九三四

煉獄説に關して希臘教會及びラテン教會の差。ベラー

第五期、中間の世の教理を重するの傾向新教部内に顯はる、死は眠りなどの説を代表する者。……………一一九六—一九七

復活

第一期、初代教會の復活に關する一般の説。オリセンの説。復活の信すべきを証する議論。……………一二四—一二七

第二期、字義的の説行はれたりとの証。アウガスタンは榮光の躰の特性を説く。……………四一—四一六

第三期、煩瑣學派は未來の躰と現今の躰との同一を唱ふ。エリ

ゲナ、及びデユランダスの説。復活躰の特性に關する  
アクイナスの説。……………五九一

第四期、改革時代にも新發達をし。カッドフェイス及びモアアの  
中間の世の躰の説。……………九三六

第五期、過ぐる二百年間ルーテル教會の發達に關してカーニス  
氏云へるあり。現今の神學界に存する異説。……………一九七一—一九八  
結局の賞罰

第一期、未來試練の問題に關する初代教會の説。大審判は靈魂。  
永遠の運命を決する者なりとの説。オリセンの教へた  
る恢復説の意味。未來賞罰の性質に關する説。……………

第二期、恢復説を取る者の例。教會一般は恢復説を棄てたるの  
証。未來の罰の性質。未來の賞に關するアウガスタン  
の説。……………二一六—四二〇

第三期、エリゲナの教へたる改復説。煩瑣學派の未來の罰の性  
質及び度に關する説。玄奧派は未來の賞を尤も論ず。  
エリゲナ及びエクハートは神に吸収せらるゝの教理を  
教へたるや否や。……………五九一—五九六

第四期、無限刑罰説に反する者少し。消滅説の代表者。天主教  
及び新教神學者の未來刑罰の性質に關する説。キリア  
ム、シャールックの無限刑罰説の辨護。……………九三六—九三八

第五期、十八世紀に於て未來試練の思想に對する普通の感情。  
今世紀福音主義の學者中にも恢復説を取る者あり。改  
めざる者の消滅説を取る人。ハンオステルショアの言は  
神學者の大躰の代表者として云へる者なり。未來刑罰  
の性質に關する説。……………二〇一—二〇三  
宇宙神教派の教ゆる恢復説。惟一派の取る所の恢復説。  
エフ、エチ、ベツチの立場。……………二〇三—二〇五

近代の天主教は受洗せざる小兒の運命に關して説けり。一二〇六  
スウェデンボルグ派及び其他の者の天の生命の記……一二〇六

題目見出終

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な印刷文字が並ぶ）

教理歴史

總論

聖書の記録は之を蒼天の星辰に比すべく萬古常に易らず、預言者の言葉、  
 基督の言行、使徒の教訓等は恒久無限の道徳上の穹蒼に輝く光明なり、  
 夫れ星辰が行人の信を通じ其榮光を觀して以て万人の心情を照らし無學  
 の水夫も之を導する事敢て大科學者に異なるなきが如く、聖書も亦万  
 民其平に來り靈の生命を得又靈の嚮導を受くるに適す、  
 兩者の類似單に是に止まらず、星辰は吾人を挑んで研究の念を生せしめ  
 又解釋を試みしむ、而して種々の難題途に當て横はり從て種々の答辨相  
 錯難反對する者あり聖書も亦吾人をして研究解釋の念を起さしむ、蓋し  
 其記録は明瞭に陳述するよりは寧ろ暗示する處多ければなり、又其歴史  
 上の實事の形狀を以て記載する處の事は數々神國に關する推論全牀の基  
 礎たるとあり、是を以て人心遂に深遠の道路を徘徊せざるべからず、然  
 り而して人心は其問題を研究して得たる處の者を之を他の問題を研究し

教理の  
は遂に  
可らず



て得たる結果と比較せんとするの自然の情あれば茲に神學の講究生じ定  
義來り、而して最後の神學の系統あるに至る、而して神學の問題たる甚  
だ複雑にして且つ神秘幽玄のみに觸る者なれば一人の解釋家は自から他  
の解釋家と一致する能はず、又此問題は神聖なる事物に關し、永遠の利  
害に關する甚だ大切ある者なれば其解釋家も不合の點あるは兩派の眼  
に實に大事と見ゆるなり、茲に於て急激なる爭論を生ず、爭論又爭論、  
漸く一點を鎮定して他點又生ず消として其界限を知らず、是を見て或る  
人々は心を傷め之を救濟せんとして曰く最早定教を組織するを止めよ、  
神學上の定義及び組織を以て自身と世界とを苦むるを止めよ、聖書を取  
り扱ふは單に實際的のよしして可あり之をして正義の生活を指向し又獎勵  
せしめば足れりと、此助言は一見甚だ理あるが如く且つ或る範圍内に應  
用するときは甚だ安全なりと雖も之を其儘に適用せんとするは虚空妄誕  
の極と云はざる可らず例へば星宿の光跡を見て單に詩歌的の感情を激し  
或は又航海の嚮導を助けん爲にのみ用んとする人々は勿論天の數理に昏

まれて更に他を知らざる人より其利益を得ると多かるべし、聖書を用ゆ  
る人も單に其靈上の美麗榮光を見て以て其心情を感激し或は其想像を暢  
快せしめ、又其格言教訓に依りて實際的の行狀の嚮導となさんとする  
人々は之に依て益するとは精密なる定義或は該博なる系統を組成せんと  
心を勞する人よりも遙に多かるべし、故に單に智力のみ吸取せらるる  
は最上の富有を得るに難かるべし、然れども此の理由に依て唯か天文學  
を禁止せんとする者あらんや、誰か神學を禁止せんとする者あらんや、  
是れ全く無用なり、夫れ人心の中にある科學的の刺激の吾人を驅て宗教界  
にも他の範圍内に於けるが如く其精神を働かしめんとす、而して敢て之  
を抑壓しざる者なし、加之科學的精神を宗教界にも用ゐるとい吾人の  
神聖なる義務の一なりとす、何とされば智力を用ゐて其正鵠を誤るとき  
は心情を害し靈性を損すべしと雖も之を正當に用ゐるときは大に其性を  
富ますを得べく又明瞭該博の見識敏達聰明の思想は苟も心意操練の器械  
となり果つるに非ざる以上は大に神聖なる感情及び勉勵の源とある者也

ればあり、是故に教會が何れの代に在ても基督教理を組成せんと務めたるは天然至當の刺激に従ひし者と云ふべし、然れども此事業は半は至當の方向を取りしとするも往々不正の性質を顯はし不法の方法を取りしとあり、腕力は道理の領内を闖入せしとあり、自由思想は傲然たる無誤インフアンディカ説の爲に壓倒せられたるとあり、基督教の本性に非ざる要素教會内に進入したるとあり、虚妄の教理は虚妄の習慣を保持せん爲に、或は主教の傲慢に服事せん爲に新に案出せられたるとあり、傳説の大に天啓の處を奪掠したり、神學者等は彼の星を見て得たる事實に依て説を爲すよりは寧ろ古代の星卜者の説に依て星を判定する一種の天文學者の如く、多く古來の傳説に依頼したり、而して此等の妄誕に對する反働の勢力も亦常に正當の定限内に働かず、極端説を以て極端説に易へて其非を知らず、急激派は破壊に於て其當を失ひ、保守黨の保持に於て其宜きを得ざりき、故に是等の進歩的と退守的との兩方を觀察するときには恰も「ペテロ・ロップ」の織機の

教理の歴史  
を熟知する  
の利益

如く遂に基督教理なる織物を完成するの期あるを得ず、左れを考一考するときには敢て又希望の光あきに非ず、夫れ基督教思想の如く深遠複雑なる者に在ては一進一退の間に進歩を爲し、妄誕不正の運動中に在て而して遂に完成するに至るは死る可らざるとありとす、夫れ教理發達の進路は或は正當なるにもせよ或は不正當なるにもせよ愉快と教訓とを以て充滿するなり、故に力を悉くし心を用ひて之を研究する者は必ず是に依て二大利益を榮るを得べし、(第一)教理上の諸主義が理論上並に實際上に於て自然に取る所の傾向何邊にあるやを知るを得るなり、(第二)現今の教理上の諸系統を適當に了解し又估價するの準備とあるなり、抑も事物の其前項を能く知るにあらずんば未だ充分に之を知ると云ふ可らず現今の神學界を能く了解せんと欲せば遠く古代に溯り其形を成すに至りし所以を尋ねざるべからず

基督教理の歴史なる者は神學の一箇の科目として認識さるゝに至りしは極めて近代の事にして之に關する著書も爭論的精神を脱して純至た

教理歴史の位置

六

る歴史的の精神を有する者の出でたるハ大概今世紀中なりとす。人若し教理歴史が神學中に占むる地位の如何んを知らんと欲せば是れ至て容易なりとす。夫れ教理の歴史とるや甚だ切要にして且つ其範圍甚だ大なれば普通教會歴史を離れて殊に之を研究するの價值ある者あり、又定教學者が數々教理歴史上の事實に引照するの要あり、而して煩雜なく之を爲さんには長々しく之を探鑿するの勞を棄て其結果のみを洞見せざる可らず、故に定教を組織するの業は既に精密ある歴史的評論を遂げたる後に非ざる可らず、是を以て見れば教理歴史は普通教會歴史と組織神學との中間の地位を占むる者にして前者を増補し後者を準備するものありとす。

神學の此分科を學ぶお當ては重に注意を各時代の教理思想の大體の傾向に與へざる可らず、其切要左程大ならざる者は之を次よせざる可らず、又單なる好奇心よりして一箇人の持説思想等を長々しく評論するを避けざる可らず、又哲學異端或は政府の權力等にして神學界の運動に影響を

大主意を撰むの規則

誤謬の解釋を慎む可し

及ぼせし者は其勢力の如何に比例して之を記述する場處を供せざる可らず、又教理歴史の穿鑿者は種々の用心を爲さざる可らず、グーセラ氏の云へる如く一時代の思想を勘定するに當て其時代が實際唱へたるに非ざる思想を之に歸することを慎まざる可らず、定教は其起源甚だ不定の有様にて發すると數々之れあり、故に此曖昧なる説を取て直ちに後代の充分ある定教を含有する者と云はば是れ眞理に對する大罪人と云はざる可らず例へば初代數世紀間の人々は聖餐に陪するお依て特殊の神聖を得べく、又キリストも之お現存し給ふ杯の語あるを以て直に化驗説の教理初代の教會に存せりと云はば是輕躁に過ぐるの説と云はざる可らず、又語句の同一あるが爲に其教理も亦各時代同一なりとの證となす可らず一時代の脩辭的の語は他の時代の定教的の教訓とあるは數々見る所なり、教理歴史上時期の區分に關しては歴史家の互に一致せざる所なり、吾人の見る所を以てすれば第一期は、コンスタンチン大帝の代に至らざる可

五大時期

總論

七

らず、其以前には如何なる著名の事實ありしにもせよ、教會が此大帝の下に在て經驗したる事程著るしき者あらざるべし、單に外部の境遇革新せしのみならず神學者中にも又其議論中おも一新機軸を呈せり、只夫れ區畫の年代の如きは些末の事たるに過ぎず、普通教會歴史を於て三百十三年即ち基督教寛祐の勅書ミランより發せし當時を以て第一期の終りとせずは勿論至當なり、何とされば是に依て異教徒の迫害終りを告げられたるあり、又是に依てコンスタンチン帝が基督教徒の保護者として爲したる功績の全跡を一觀するの便を得るを以てなり、然れども教理歷史上に於ては大帝の一身左程大切に非ず、故に區畫の年代は寧ろアリウス争論の始め三百二十年頃に定むるを以て適當とす、故にラウレンティウスの如きは之を第一期に入るを得るあり、氏は實際第一期に屬する人ありと云ふべきは氏の記録には毫もアリウス時期の説に關する者なきを以て見るべし、第二期は正に基督教國全般を激勵せる教理争論の全跡を含蓄せざる可らず、故に六百八十年以前に終る能はず、而して吾人は此時期を七百

廿六年迄擴むるの理由を有するなり、此年代は直ちに吾人をして彼の中世ギリヤ教會の一大神學者グマスコのワロンに至らしむ、又吾人をして彼の教王政治をして東帝國より分離せしめ獨立して別に西帝國を建設し遂に自由ムラテン風の基督教を發達せしむるに至れる原因なる偶像破壊の争論に至らしむ、第三期は勿論宗教改革の拂脱に至つて終る、第四期の終りとすべき適當なる歴史上の事實を發見せると容易ならず、然れども千七百廿年とするは尤も適當なりとす、是を於てシンゼンドルフの下に「モンビアン」派の起リケニスセーの下に「メデスト」派の興れる當時に達す、亦現今の合理論の一大運動を考察するに於ても甚だ便利なり、此年代は勿論英國の自然神教の起原とは相合せず何となればローランド、ハーバー、マフラスペリ及びハイランド等の千七百二十年前より顯れたればなり、然れども此年代は則ち英國の自然神教者の著者が廣く歐洲大陸に勢力を振ひ去時よりロソンスが其有名なる著書「基督教の根據及び道徳を論ず」を出版せしは千七百廿四年ありヤハストンの「奇

「跡論」は千七百廿七年、廿九年に顯はれたる「神の」基督教の創造の  
 昔より存する書は千七百卅年に世に出で千七百四十年獨逸語に翻譯  
 せらるる其の他「メルガン」チャップマン及び「ボリンブロー」等も此年代の後  
 に來りしなり、佛蘭西にては此時に「ボルマア」の懷疑說終りを告げ「セル  
 マン」にては「ライオン」ウオルフの哲學の興起此時にあり、而して此哲  
 學は實に「セルマ」の合理論の起源擴張を助けたるを明なり、第五期に即ち  
 現今に至る迄ありとす故に吾人の前に左の五期あり、  
 第一期は使徒時代の終りより三百二十年に至る、  
 第二期は三百二十年より七百二十六年に至る、  
 第三期は七百二十六年より千五百十七年に至る、  
 第四期は千五百十七年より千七百二十年に至る、  
 第五期は千七百二十年より現今に至る、  
 各時期は各其特性を有す、只餘り極端の意義を以て之を名く可らず、第  
 一期に於ては異教に對し又は基督教の信仰の本性を攻撃せんとする過激

各時期の特  
質

の異端に對し基督教の全躰を防禦するの必要あり、故に之を名けて「辯解  
 の時代」と云ふ、第二期は基督教系統内の箇々の点に付て激烈なる争論の  
 ありし時代なれば之を稱して「争論の時期」となす、第三期即ち中世時期は  
 既に教會に存し來れる信仰を組織し又防禦するを以て其特性とす、「煩瑣  
 學派の時期」と云ふ、第四期に於ては一方に新教は「ローマ教に對して其論旨  
 を辯護し又主張するあり、他方には「ローマ教其從來の信仰を精密明確に再  
 呈するの要を感じ、又新教は内に在て教十の宗派に分裂し、各派互に其  
 特説を熱心に唱道せしかば争論及び信仰箇條の如き者山を爲せり、故に  
 此時期を稱して「信仰告白の時期」と云ふは新教に對して尤も適當なりとす、  
 第五期に於ては教理上の運動非常に複雑に赴きたるは其重なる特質を簡  
 略に記載せると甚だ難しとす、今若し現時期には道理の要求は天啓の要  
 求に反抗し自然は超自然に反對せんとするの傾向あり之と共に反對の要  
 求を調和せんとするの傾向もありと云ふ、恐くは幾分か今時期の特性を  
 記載する者云ふを得べし、故に之を名けて争論及び講和の時期と云ふ





無形界の第一原理を採用する者ありヒサゴラス派エレア派の如きは其例なり、又一個人の例を求むれば物心兩界の原理を二つながら認識せる者あり、アナキサゴラスの如きは殊に然りとす、(氏はソクラテスの先驅者にして大切なる人なり)氏は明に心意の世界と物質の世界との間に區別を著したりき、此等の初代の哲學中よも往々無上存在者(神を指す)に關して云ふ處なきにあらずと雖ども大概はキリスト教思想の最高の部分に貢を納るゝこと甚だ少し……神を以て道德上の秀徳及び政治の中心となすが如き、神と人との關係の如き、若くは道德的行爲の深遠なる意義等の如きは絶へて見るを得ざる思想なりとす、

又アリストートル以後の哲學はエピクリアン派及びストアック派に依て代表せられしが、此亦キリスト教の尊重を受るに足る者甚だ少し、成程兩派共に實際的にしてソクラテス以前の哲學が推想的の相貌を有せるに反し、重に人生に關するを論じ、而して各個人行爲の標準を求めたり、彼等の大問題は如何にして現世界の狀態を調整し又利用す可き乎にあり、

エピクリアン派

此の如き探究を養成したるは時世の然らむる所にして當時政治上の擾亂、不信、錯雜等より人々外部の境遇の信任す可からざるを知り是に於て人生なる者を思考するの折りを得、又行爲の規則を確定せんとの念を生じ、その經驗の輕重を測る標準を置かんと欲するに至りしなり、然れども之れと同時に腐敗せる時代のとなれば正當健全の規則を悟了するの點に達する能はざりしは惜むべきなり、

エピクリアン派は快樂を以て標準とす、是れ實にキリスト教に反對する所なり、その教ふる所を見るに快樂は凡て其自身に於ては善あり、只一層大なる快樂の途を妨ぐるときにのみ惡となるとす、又此學派は各個人を示すに不變なる善の標準を以てせず、又は行爲を賞罰する神を以てせず、其認識する所の神は幽冥の神にして絶へて世界の事件には關涉するところとす、又死を畏れ未來を懼るゝの念慮を去るの良藥は人死して万事空しと云ふ教説を取るにありとす、畢竟する所エピクリアンの最良の主義の快樂の撰擇の意を用ゐると云ふに外ならず、故に賤劣急驟の人間

派 ストイック

にはエピクテリウスの教理に必ず最大の精意罪過を導く者もあり、又性質の少しく鈍き人或其嗜好の少く純正なる人には此教理は清潔なる私慾主義、完全なる主我論、即ちエピクテリウスが「心志の安寧」と名けて稱揚したる者に陥ると必然なりとす(B. F. Cooker, Christianity and Greek Philosophy) ストイック派の云ふ所は之に比すれば稍々安全ありとす、此派は徳即ち道理に適合する生活を以て最上の善となし、四海同胞の説を教へ、又人々を謙退して各其分を守るべきを教へたり、然れどもストイック派は未だ以てキリスト教に親近せる者となすべからず、其神と世界とに關する説は全く凡神的にして有神的にあらず、故に若し神の攝理人間の自由等を適當なる意味にて其教説中に入れんと欲せば必ず矛盾を免れず、又未來に關して云ふ所なきにあらずと雖も靈魂の不滅は全く之を否拒せり、其四海同胞の説たるや單に空漠たる理論に止まり決して實際人間を廣く且つ深く愛するとなし、又其大に稱揚する所の謙退説の如きもキリスト教に云ふ所の謙退の徳とは異なり、只不平を抑へて天命に黙従せると云

アリスト  
トルよりも  
寧ろプレト  
リを尊信せ

神の教理  
を以て  
其の  
精神の

ふは過ぎず、快もて永遠の愛(譯者曰く之れ神を指し又云ふなり)の中に自らを投じ、柔和謙遜の心を以て従順する如きよめらざるあり、實にストイック派の著しき傾向は非基督教の精神則ち傲慢自滿の心を養成する者あり、勿論エピクテリウス等の輩は未だ此傾向を表はさざりしも尙その教説中よは之を含蓄し後遺傳し來て發達したる事明かなり、斯の如くストイック派の哲學其後の哲學も共に神學に反對すれば初代のキリスト教は自然に神學の時代に向て同意者を求めたり、而してギリシヤ哲學全盛の時代を代表する二大家プレトリ、アリストトルの初代キリスト教の範圍内には同等の好遇を受けるの性質はあざりければアリストトルの如きは煩瑣學派の時代には特殊の待遇を受けたりと雖も、初代數百年間の神學者中よは之を稱揚する者なかりき、蓋し此等神學者は分解組織上に心を勞せずして其論趣精神のみに力を費したり、故に自然の勢を以てアリストトルの著書を重するに至り、殊に其高尚ある精神を以て深幽なる倫理説の如きは彼等の心を引くと甚しかりむあり、

基督教徒の  
尊信を得た  
るプレト  
派の特點

今プレト派の教ゆる處にしてキリスト教の尊重を受くるに足る者を舉ぐれば次の諸點を以て尤も切要なりとす。其第一は有神論の尊重なり。有神論の尊重は、(1) 有神論の尊重なり。プレト派の著書中には適當に有神論と云ふ可き者即ち無上有心的神論に反對ありと思はるる處なきにあらず。其觀念の説を見るに善の觀念を以て最重の者とし是より高尚なる者ありとし、又此觀念は客觀には真理、主觀には智識を興ふる者とし、其智力世界に於けるに恰も太陽の有形世界に於けるが如しとなし、万物の知識の根源たるのみならず其現狀及び眞躰の根源ありとし、現世界に於ては光明の主にして他界に於ては真理と道理の源なりとし、存在物中最高最良の者なりとせるが如き語より推してプレト派は神を確定する者ありとせば其神たるや善の觀念と同一なるや知るべし而して善の觀念と云ふ以上は自然有心的なるよりは寧ろ無心的なるを示す。故にプレト派は有心的の神を否拒したりと云ふ者あり、然れども此註釋は全く誤れる者なり、他に尙有力なる解釋家あり、プレト派が神と諸觀念の關係に付て堅實なる理論

を唱へたるを論せり、即ちリッター氏の如きはプレト派の所謂觀念とは「神の理性の或る定形」にして神自身を指すにあらずと云へり、此説に依れば善の觀念は尤も根本にして尤も廣大なる神の理性の形と云ふべきなり、されど此點に付て論ずるは必要にあらず、プレト派は自ら神と諸觀念の關係を定決せしや否やに關せず、有心的の神を説きしこと明なりセラシ、氏曰くプレト派の數々神に付て教ゆる時に之を有心者とあせり、吾人は彼が此語を用ゆるは全く衆民の宗教思想に適せしめん爲なりとするを得ず、彼が斯く云ふは觀念不動論の爲に實に止むを得ざるにして現象を解釋せんには必ずかく論せざるを得ざるあり」と(Plato of older Academy)實にプレト派の著書中ふは神をば唯獨り睿智なる者にして、善の源、されど惡を生ずる原因に非ず、不變にして虚偽なる能はず、思考し得べき者の最善最良、其性徳絶對的に完全、宇宙の大父おして万物を永遠不變の模型に造り、小より大に至るまで万物の完全に赴くため之を統治庇保する者、又万物の眞正の法準なりとせり、

(2) プレトリー派は靈魂の目的と才能とに關して高尚なる靈上の意見を有す。今その云ふ處を見るに尤も大切なる真理三つあり、曰く量る可らず悉くす可らざる富源ありと、曰く此富源は人間の靈魂に依て達し得べき者ありと、曰く此富源は現象世界にては見るを得ざる者ありと、プレトリー派は始より終りに至る迄眞に高尚活潑なる信任を以て感覺而上の所に實跡存し其實跡は地上の不完虚幻の者に遠く勝ることを主張す、例へば「シムボツアム」なる書に於て絶對の美麗を記して是れ決して増減變化する者にあらず他の万物に永却或は暫時の美麗を附與し、之と眞正に靈通する者には單に美麗の形像のみならず、其實跡を生ずる力を賦與すと云へり、又「レバプツク」なる書に於ては此と同様なる言を絶對の善に應用したり、曰く絶對の善を勘考するに依て人の靈魂は智慧を以て輝き異説紛々の中は在て毅然たるを得べく、見る可き暫時の物に欲求せらるると雖も解かれて赫々たる光明を見るを得べしと、此等の實跡に對して尊重するを智者とし、之を擯斥する者の其如何なる範圍内か於けるも愚者とあす、又

「ロース」なる書中に云ふあり曰く「我思ふに眞正の立法者は只永遠の美麗の常に伴ふ處の者を以て目的となし、其他の富貴も利益も如何なる者と雖も苟も徳を離るるときは之を去らざる可らず」と「シムボツアム」に於て愛を稱賛したるは又同理を示したる者と云ふ可きなり、蓋し愛はプレトリーの考ふる處に依れば完全永却を深く尊び之を慕ふことなり、勿論プレトリーの句法は或る度か於てはキリスト教と反すること明なり、彼は凡て此の云ふべからざる實跡なる者と基督教思想に屬する神の身位との間に明白ある連絡を爲さざりき、然れども之に拘はらず此兩者の間に連絡を供することは甚だ容易にして其結果は殆ど同一なり、故に孰れの世に於ても信仰の深奥なる人々はプレトリーの記述を以て神の完全なる性徳を寫せる者とあし、之に依て感激せられ神と一致するの熱望を生ずるあり、加之プレトリーは殆ど人の靈魂は神の内に永遠の産業を有するを記載し、又神を想見するは尤も幸福ありとし、或は神は己れの如くあらんことを勵む者は之を愛し之を富ますと云ひ、又ハ此の如き人が此世を去るは是

れ善なる神に向て旅行するなりと云へり、  
 (3) プレトール派は靈魂の不滅を教へ、未來の賞罰に關しては嚴正眞率に教へたり、其ソクラテスの口を藉りて云ふ處を聞くに曰く「我は次の信仰を全く信す即ち未來の生活の實に存すること、死入の靈魂尙存すること、善者の靈魂は惡者よりも幸福を受くること、是等は皆我が信する所なり」と、而して此信仰を哲學上より證する爲めに靈魂の性質の單純にして復雜合成からざることを、及び其自動の勢力あることを引擧せり、即ち曰く「靈魂は神の像にして不滅ある者、良智ある者、同一なる者、分解す可らざる者、又變す可らざる者なり」と又曰く「若し靈魂は果して自動の者ならば即ち始なく又不滅の者からざる可らず」と、又靈魂の道德的の行爲の意味は實に靈魂を注意する如何に比例すとす、彼ソクラテスの口に依て呼で曰く「我友よ若し靈魂果して不滅ならば吾人は如何なる注意をさすべきや當に此生涯ある時間の一部を關してのみならず、永遠の時間に關して意を用ひざる可らず、故に靈魂を放棄して顧みざる者の危険に實に恐る可し」と云へり

「トール」又曰く「人誰か全く愚痴なる乎若くは卑怯あるに非ずんば死を畏る者あらんや、唯惡をさすを恐るは蓋し不義を以て充ちたる靈魂を以て下の世界に往くは惡の最後にして又最惡なり」と(ゴアヂアス)「トール」に依れば未來の罰は太略矯正的の目的なれば假令數世に渡るとも遂には其限りありとす、されど醫す可らず許す可らざる罪も亦なきに非ず、即ち惡の極に至れるもの殊に暴君虐主の如く貴き權力を誤用せる者は永遠なき刑を受けざる可らず、斯くの如き者は「地獄」に放擲せられ再び之より脱する能はず、是れ彼等に適當ある運命なりと、(フヘード、及びゴアヂアス)「刑罰の性質に關して」プレトールの取る所は稍々合理的の傾あり曰く惡を行ふ者の最大の罰は「漸次に惡の形になり惡人の如く生長して善人と談話するを避け之を離れ惡者の黨に連着し之より従ふに至るあり」と是れ則ち最大の刑罰なりと、(ローヌ、第四卷)「此數點の外に尙キリスト教の思想に近寄れる者少しとせず、其二三を擧げば左の如し「徳は自然の者に非ず又習得したる者に非ず、神の賜なり」と

の説あり(以テ)又「吾人は如何なる善を如何なる人より受ける事惡を以て之を報ゆ可らず」(クリスト)との教あり、勿論アレト派の教訓とクリスト教との間に緊要なる點に於て反對あるは疑なきことにしてアレト派の云ふ處にして殆ど吾人をして福音書を想起せしむる者なきに非ざるも、其全部の教説と相照らして解釋する時は全く聖經の教訓と異なるを發見するところなきに非ず、然れども之に拘はらず、尙其互に接近する所多くあるは明なる事實なり、

初代の師父等は一般にアレト派を重せしが其中にウヤスマン、マイナー、は尤も多くアレト派の説を引用し又クリスト教を知る以前に其心を殆ど満足せしめたるは此系統ありと云へり、アオヒロハアレト派を以て哲學者中の「尤も尊敬す可き者」を稱せり、アレキサンダリアのクレメントはアレト派を指じて「眞理を愛するアレト派」を呼びたり、クレメントの種々の哲學より最良の元素を精撰する所謂折衷主義を以て眞正のものなりと主張すと雖ども、然れども自らは蓋しアレト派に傾き居りしこと明か

アレト派  
を稱賛せる  
初代師父の  
言

り、ミスシマス、アヘリクスは曰くアレト派の神に關しての議論は他の哲學者よりも一層明瞭にして其眞諦も、之を表はす所の名稱も、共に全く天に屬する者なり、而し時に或は普通俗人の信仰を以て混することある耳と、(オクタグエス十九卷)アレキサンドリアはアレト派を呼んで「高尚にして哲學者の柱石なり」とし、又「神のアレト派にして其思想多くは殆ど神の思想なり」と云へり、ラクタンシアスはアレト派を記するに當て普通の判断に依て見るときはアレト派の實に凡ての哲學者中の最賢なる者ありと云ひ、又シセロがアレト派に倣ふの故を以て之を哲學者の列に加へたり、以上の如き稱賛の辭は初代の師父等が未だ曾てアリストートルに與へたるとなき者なり、故に之を推して考ふれば初代の師父等はアレト派を取りしと明なりと云ふ可し、然ども尙精細に之を云ふときは初代三世紀間智識を重するキリスト教徒の哲學の折衷的の組織にし而して就中「アレト派は異教世界より來れる要素としては最重の位を占むる者なりしと云ふ可きあり、

異教哲學全體の價值に關する諸説

異教の哲學全體的の價值に關しては教會師父等は種々異なる説を有せしが、シヤステス、アタタ、ネセトコラス、アレキサンダリアのクレメント及びペリゼン等は尤も之を貴重せし人々を以て「クリスチヤン」は如何なる人種に關せず、皆道即ち人心を啓發する神の理性の啓發を受けざる者なしとし、異教の哲學者詩人或は聖人お付て左の如く云へり、曰く「人は各其根元の道の分賦を有する度お從て能く語れる者あり」と、(辨解第一、四十四章、全第二ノ十三章)アレキサンダリアのクレメントは尙一層明瞭に異教の學問中に神の要素あるを認め、「哲學は或る意味に於て神の攝理の事業たるを疑はず、彼曰く「哲學の職ハヘレニク」(ギリヤ人と云ふ)をキリスト教に導く教師あり……夫れ福音の宣傳は今日其適當なる時期お來りし如く律法預言も亦其適當なる時代お異邦人(ギリヤ人以外の人を指す)に授けられ、而して哲學のキリヤ人に給與せられたるは彼等の耳をして福音を聞くに適せしめんが爲めなり」哲學は單にキリヤ人を正義の道に薰陶するのみならず、論證に依て信仰に導く者を訓育し

哲學を尊重する言

福音と同等に置かず

又は已に信仰を有する者に一層濶大なる見識と確信とを與ふる者なりと、クレメントは公にクレメントの如く哲學を稱揚せざりしも間接には一層多く其切要なるを認識したるが如し、蓋し其思想の系統中お多く之を含有するを以て知る可し、以上論じ來りし如く師父等の多くは哲學を尊重したりと雖も決して之を以て福音と同等の位に置かさざりしを明なり、アツケルマン氏曰く「哲學は單に哲學としては師父等に價值なき者ありき、唯彼等が之を尊重したるは其多少に關せず、若し哲學を以てキリスト教の準備と見做し、基督教の信仰に導く處の者と信じたればあり彼等がクレメントを稱賛したるは決してクレメントとキリストの間に區別を立てしに非ず、實に彼等の全心全意は一にキリストに向ひ、只クレメントの教義にキリストを指すと考ふる時に之を極めて之を稱賛したるなり、蓋し彼等の説に依るに若しクレメントはキリストの時に至る迄生存せしならば必ずや主耶穌の前を膝て己れの理想が基督に於て又基督に依て成就せしを喜びたるならん」と(Christian



Element in Plato) 又先に哲學を尊重せる言を味さし著述家も聲を屬せしめて哲學のキリスト教の天啓に比較するときは不完全不十分なることを主張せり、ソヤスタン、及びクレメントは共に哲學者等ハ其最も高尚ある思想を猶太人の聖書より採用せりと云て彼等の功を制限し、以てギリヤの智慧は断片碎碗の者あるを断定せりソヤスタン教へて曰く立法者哲學者等は皆真理の一部を見るを得るのみなれば、自ら矛盾する處往々にして之れあり、唯完全圓滿の真理はキリストに於て顯はれたりと、クレメントは曰く哲學者の輩は真理を處理すると恰かも「マツカンテス」が「ペンテオス」を虐待する如く其四支を裂碎せり、彼等は「永遠の真理の一片を伐り離せり、而して之をマイオニサスの鬼神論よりせずして永生の道の神學より離せるあり」と、希臘哲學は全真理を了解するに於て足らざるのみならず、主の誠命を行はしむる力を有せず、「哲學者は基督に依て成人とせらるるに非ざれば小兒たるを免れず」、コリント曰く「福音の希臘論理法に依て立つ處の者よりも一層神聖確實なる自己の論證を有す」と云く (Contra

哲學を蔑視する者

Celsum. I. 2) アイレニアスは以上の諸師父に比すれば稍々中立の地位を保ち、殊更に異教哲學に反對せず、又殊更に之を稱揚せず、唯一度「ノステラツク」の異端に反對してプレトを引用したるをみるのみ、蓋しキリスト教信仰及び生命の代表者として有名なるアイレニアスに取ては只歴史的實際的の利害のみ其心頭を支配せしなり、セルサは曰く「セルサは吾人今翻て他の一方を見るときは師父等の内にも殆ど全く哲學を蔑視する者あるを知るアシヤン問ふて曰く曾て高尚なる者哲學より生せしとありやと、又曰く哲學者なる者は皆空想を戦ひし暫假未熟の忘念を以て互に獨斷するあり」(Oratio ad Graecos. II. III.) タータリアンの取る處ハ左の如し哲學者は時としてキリスト教の主張する真理を主張せざるに非ず、然れども是れ本來哲學の有する者に非ず、恰も船舶が暗黒の中ハ偶然港を發見することあるが如く、僕伴に依るか、然らざれば万人に普通なる良智の徳にして哲學の特有に非ずと、タータリアンは又哲學者が異端説の倉庫を供したるの事實を見て殊ふ之を擯斥し、之を呼て「異端家の教父」

となせる程あり。故に斷言して凡て哲學者を交親するを一切絶つべしと云へり。ターリアン呼で曰くアセンストモルサレと何の關はりあらん、「アカデミー」を教會と何の一致するとあらんや、異端家と基督教徒と何ぞ與らん、吾人の教訓はソロモンの廊下より來る、ストイック、プレト、或は他の論派と雑色のキリスト教を生ぜんとする企圖を止めよ、吾人キリストイエスを得たる後何の奇論を要せんや、福音を受くる後何の探究を求めんや」と、ターリアンは又尤も極端なる反對を確取するかの如くキリストの死と其復活に關して左の如く云へり、「是れ附會のとなるが故に如何にしても信仰せざる可らず此事實は出來得可らざるが故に確實なり」と、尤も斯くの如き語は悉く異端の者として見る可らず、何となればターリアンの數々過實の言を吐くとあればあり、故に爰に云ふ處も恐くは左の意ある可し、即ち自然の人間には信する能はざるとも、神に於ては最も適當なる事にして、又全く神の力の範圍内にあるとなりと即ち普通吾人の信する脱たるに外ならず、ターリアンは其一身より云

異教哲學が  
初代基督教  
神學に及ぼ  
せる實際の  
功

ふときは實に自己の信仰に道理を求むる尤も敏達なる人あかき、ターリアンも亦全弊より云ふときは異教哲學を尊重せざる者なり、其説に依れば哲學の理論的の價値の代表者が互に相一致せざるを見れば殆ど空と云ふ可く、其實際的の價値の其歸依者の生活を改良する能はざるに依て甚少なきを知るに足るなりと云ふ。以上の評論よりして正當の結論を爲せば公教會師父等は己れの教訓中の實質の爲に異教哲學を證認せると甚だ稀にして大抵宗教上の真理は關しては己れ一々の説の優等且つ正當なるを認識せりと云ふ可し。故に吾人は哲學が彼等の教訓に根源の勢力を及ぼしたりと云ふを得ず、然れども之と同時に哲學は稍々此時期中教理發達の要素たりしとは許さざる可らざる事實也、(第一)哲學は異端の發起を助成したるは從て又基督教理を確實に組成するの機會を供へたり、(第二)哲學の師父の心に推想的の思想を養はしめ、キリスト教を單に其實際的の形狀に於てのみならず、其理論の方面より考査するの傾向を生せしめたり、(第三)哲學は基督教神學の或

點を解釋するに於て之を採色せり、例へば「プロテト」派は間接に或は直接に「ロマス」の教理の解釋法を變じたるが如し、されど此教理の實質は決して「プロテト」派は引來れり云ふに非ず、或は其解釋法も亦全く「プロテト」派外に負ふ處なしと云ふは誤りなり、(第四)哲學は尤も推想的の師父の思想に或る中心とする處の説を供したり、譬へば「オリゼン」は靈魂が身軀の存する前に存すと云ふ説を採用し其思想の組織中に於て之に重要な地位を與へたるが如し、

新「プロテト」派は其起源此時期中に在り、然れども其發達せる系統となりしは重に「ナイン」以後の師父の時にあり、其勢力を及ぼせるも亦多く次の時期中にあれば今之を措て後に論ずるとは實際の利益なる可し

### 第二節 異教家の批評及び異端

異教家が基督教徒の一身と其信仰とを攻撃せるとは直接に教理發達の機を促したるが如し、蓋しキリスト教徒の迫害者の前に立て己れを辯護し、其怒りを鎮靜せん爲には己れの行爲と信仰とを誹難する者も向て充分なる

異教徒の批評及び異端の發達は、基督教徒の熱心に對する刺戟及

異端に對する熱心の

異端に對する熱心の

答辯を爲さざる可からず、又初めキリスト教を誹難せし者も只單に輕蔑憎惡の念より發せし者なるも三世紀の中頃より異教家のキリスト教を注意する者稍其趣きを異にし、「プロテト」の諷刺的攻撃あれば「プロテト」の激烈ある抗辨も起り來れり、而して此等は皆孰れもキリスト教の著者に向て戰を挑む者にして之に答辯するには從てキリスト教理を確實明白に記述するの勞を取らざるを得ざりしあり、次に又異端より來れる刺激少しとせず、夫れ教會の師父等が充分の勇氣を以て異端即ちキリスト教の名義を冒かし、其實全く之と反する教義に向て抗抵するを自ら任じたるに決して誤りに非ず、蓋し信仰ヶ條も未だ確立せず、保守の勢力未だ強く張るを得ず、凡て是れ構成的なる此初代に在ては「プロテト」教の腐敗並に其廢造を公に暴露し、之を教會外に放逐するは非常に大切なればなり、是れ實に師父等が異端攻撃の爲に滿腔の熱心を費やしたる所以あり、然れども之と同時に此熱心に伴ふて恐るべき危険の傾向生じ來れり、何となれば此熱心の向ふ處は必ずしも常に誤

三種の異端

めきき非ず。即ち異端を憎むの餘り、聖徒教會の権力ある者を過度に重  
 するは望みしとあり。或は單に教理上より云ふも、教理上の極端説を排す  
 る爲に却て他の極端説に陥りしとあれば、亦、初め三世紀間の異端の之を三種に類別するを得べし、(1)猶太派の異端(2)ノ  
 スタック派及び(3)モナキアン派の異端(3)モナキアン派の異端是あり、初代  
 教會に於てはモナキアン派を以て一の異端となせり勿論此派は其非常なる  
 靈の賜殊に喪神の狀を以て預言するの賜を過重したるとは容易に従來の  
 教説の改革の門戸を開くに至る可かりしが、然れども此派は敢て當時行  
 はる、正統教理の大切なる者に向て攻撃したるをあるさし、故に此派の  
 誤謬は附加せしにありて拒否せしに非ず其過大の理外脱其隱遁主義の道  
 徳は此派の特質なり、猶太派の異端、吾人が保羅の書に於て多く見るが如く使徒時代に於て猶  
 太派の人々の教會を亂し信徒は必ずモーセの律法を守らざる可らずと主  
 張せる者あり、此教義に附着する人々は遂に發達して一の教派を作るに

猶太の異端  
エピオン派

至れり、即ち三世紀に於てエピオン派の名を以て稱せらるる者是あり、  
 アイレニアスは其書中に此名を記載せり、イレニアスもオリセンも亦  
 三世紀に於て此説を用ひたるとあり、イレニアスとヒッポリタスのエ  
 ピオン派中に種類あるを云はざりしが、オリセンは同派中に二種あるを  
 稱せり、是より先きシヤスタン、マーターは亦猶太派に二種あるを論ぜた  
 るあり、即ち一は万人皆モーセの律法の守らざる可らずと唱ふる者、他  
 は己れ自ら之を守るとを爲すも敢て之を以て万人の守るべき者と爲さ  
 る者なり、オリセンの類別に依れば一種は基督の超理的の受胎を拒絶す  
 る者にして他は之を受くる者となす、後の種類はシヤスタンの所謂自由  
 主義の人に於て、又ナザレ派とも連絡を有し、四世紀の終りに至ても尙  
 シリアに其徒ありと云ふ、此兩派は共に基督の再臨して自ら地上に王た  
 るの教義を信じたなり、固執主義の種類の人はモーセの律法を以て今も尙  
 有效なりとする教理に符合せざる爲に、ローマの使徒たるの權を全く拒め、  
 又此黨の説に依るに基督は二千年の大間にも普通の法に依り生れたるべ

唯其受洗の時、當て殊に聖靈を灌がれたるに依りて常人と異なるに至れりとなす。エピオン派の教理は或る時に、推想的の傾向を有するを以て猶太派と「ノスタク」派の元素を一に合したるが如き觀あり。セリントスの教訓の如き是なり。氏は使徒約翰の晩年に小亞細亞に有名なる人なり。又二世紀の半より後に生せる偽クレメントの諸書中にも此兩元素共に數々見ゆる處なり。

エピオン派は一の教派としては疑ひなく其數甚だ少く、且つ教會が廣く異邦世界に行はるゝに至りし後に當ては左迄基督教徒中に變動を與ふる能はざりしや明あり。然るに爰に反對の説を唱ふる者あり。大胆にも主張して云ふ、教會は三世紀の時に至る迄も全くエピオン派の説に依て支配され、殊に其基督の身に關する説の如きは全般行はれたり。而して此の説を證する爲に彼等の引用する證據は「マケドニア」の記録なりとす。此記録の断片は多し、「マケドニア」の歴史中に在り、「マケドニア」百六十年の羅馬旅行の記を述べし後に加へて「各戸各邑至る所に律法

エピオン派が初代教會に大多數を占むるを證し

預言者及び主の教に従て生せる教理行ひる」(Euseb., IV, 22) 又他の所に於て彼は義人「エムス」の隱遁的の信心を限なく稱賛したり。是を以て見るときは彼は猶太派の人にしてエピオン派たるを疑ひなし。而して諸教會の教理は彼が心に適したれば諸教會も亦エピオン派なりとす。彼等は又之に附加するに左の事實を以てせり。「マケドニア」は曾て保羅の書翰中の一文を反對の註釋を附せり。是れ六世紀の「ニキヤ」の引證する所なり。此註釋は彼等の考ふる所に依れば保羅の使徒權を否む者おして以て彼がエピオン派の説を受くるの證なりとす。又、「マケドニア」は曾て保羅の書翰中此議論に關じて吾人の熟考す可き點二つあり。一は「マケドニア」自身は其教理上何れの立場に居るや。二は彼が證する教會の取る所は何れなるや。是なり勿論「マケドニア」自身はエピオン派ありしやも知る可らず。然れども假令之を以て眞なりとするも彼が記する如く教會は彼と相一致したるが故に同じくエピオン派なりとするは虚妄あるやを知る可らず。又他の證據を擧げて其虚妄あるを證するを得べし。況んや「マケドニア」ボ

ス自身がエピオン派ありとの説は決して明確なる者も非るに於てれや、若し義人ジュムスを稱賛したるが爲にエピオン派ありと云はば此言を用して一層強くジュムスの性質を賞美したるエーセピアスの如きは尙一層エピオン派ありと云はざるを得ず、故にヘゲツポスの言より推理し断定し得べき者は即ち唯次の事なるべし、曰くヘゲツポスは猶太的の履歴を有せると、曰く隠遁的生活を賞賛する性質を有せると、曰く彼は殊にエルサレム教會の歴史に通せると、是なり、又ゴパラスが引用せる註釋に關しても吾人は敢てヘゲツポスは保羅の言を心中に有し其意に反せんと欲して攻撃したる者なるの確證を有せざるなり、斯の如きの隻言斷語を以てヘゲツポスの諸書を廣く有せるエーセピアスの證を打消すは決して至當に非るべし、若しヘゲツポスの云ふ所よりしてエピオン派ならしめばエーセピアスは何を以て彼を稱して異端の不信心を攻撃する真理の勇將なりと云ふを得んや、エピオン派の誤謬と其不敬虔とを痛覺する此歴史家エーセピアスは如何にしてエピオン派の大家を彼の如き

稱美を爲すに至りしや、ドルボル氏曰く彼が基督論の説を見てエピオン派なりとするは全く無根の説なり』(Hist. of Doct. of the Patr. of Xst.) 斯の如く論じ來れば少くもヘゲツポスの證言即ち當時の教會がエピオン派の性質を帯びたことの説の誤謬を知るに足らん、然れども此事に付ては吾人必ずしもヘゲツポスの證を要せざるあり、夫れ二世紀の中頃に當て教會の大部且つ其重なる者がエピオン派の性質を有せりと云ふは全く無據の説あり、何となれば是約翰福音書の眞成を證する議論と反する者なり、又書翰の多數而して實に新約の大部の眞成を證する議論は此臆測と撞着する者あり、是使徒師父等の諸書と相撞着する者なり、是ヤステンマーター及び其後の辨明家の諸書と相反する者なり、此人々は皆ヘゲツポスと全時代の人にして當時の教會を代表するに足る者なり、又此臆測はアイレニアスの記録に反す、アイレニアスは其大著述を記せるは恰もヘゲツポスが其書を著はせると同時にしてヘゲツポスが羅馬に旅行せし後僅か二十年の頃なり、(兩人共にエルテラスが羅馬の

監督たりし時に著せるが如し(『イノセント』)は決してエビオン派に傾く者に非ず其信仰の簡條として提出せるを見るに大切なる教理に於てエビオン派に反す、而して彼は此信仰の條を以て當時一般の教會が信する所なりとせり、彼曰く「教會は此道を受け、此信仰を傳へられ、全世界に擴張するも尙一家に於けるが如く之を保存せり……セシモンに立てる教會は之に異なる者を信せ又傳ふるとなし(『イノセント』)に在る教會も亦然り其他ゴールの教會東方の諸教會埃及リビアに在る教會或は世界の中央ある地に在る教會皆悉く然りとす」と(1. 16.)

「ノスタック派及びマニケアン派」ノスタック派は之を一ケの教派と稱せんよりは寧ろ變化常なき學派の集合と云ふを適當とす、其内にはマニケオンの如き實際的の傾向を有せる者ありと雖も甚ぶ僅少にして多くは皆推想的に傾きたり、夫れ「ノスタック派」は起源は何れあるやを尋ねるに保守主義の誤謬を忌むより來れる者なり、猶太人が猶太教を基督教内へ輸入せんと希望せるが如く異教徒は之に反して其基督教徒の名を用ゆる

「ノスタック派」

其異教の要素

ゆ及で其異教をも共に輸入せんと欲し、少くも其異教の要素中或る物を齎らし來らんと思へり、是に於て基督教なる新組織は少しも之と關係なき性質の推想説と互に混するに至れり、其推想説といふ或は古代世界に廣く行はれたる智力上の貴族政治の精神あり、或は東洋の玄奧説あり、又は惡の勢力を深く感したるも誤て感したる思想等もありき、「ノスタック派」は種々其分派ある如く從て其材料を取れる根源も亦種々あり、希臘哲學の諸説、或は猶太教、或は東洋諸國の諸宗教、皆其力を之に給せざるはなし、基督教より取れる要素にして尤も著るしく尤も勢力ある者は贖罪の思想なりとす、「ノスタック派」の存せしとは使徒保羅及び約翰の書を見て已に其當時に在りしことを知る然れども其尤も繁榮を極め尤も勢力ありし時代は即ち二世紀なりとす

其諸派の一致する點

「ノスタック派」中の諸派は大概左の諸點に於て一致す即ち神は測る可らざる深淵にして、被造世界を離るゝと實に遼遠なり、此測る可らざる神より展開生出し來る者あり、神の性徳能力を有心的の形跡に顯し、初めの

者は次の者の根源とあり、轉開連續して遂に「エオン」に至る。「エオン」は即天の諸存在者の連鎖とあり、以て無上の天父と物質の世界とを結付くる者とす。又物質は惡の伏する所にして是れ實に神に反對の者なり、物質世界の創製者ある舊約のエホバは「エオン」よりも以下に位する存在者にして精神的の存在よりは寧ろ靈氣的の存在を有する者ありとす、又救世主は同く「エオン」界より生せる存在者にして自らナザレの耶穌と合躰せり、然れども此合躰は實に暫時の者にして眞の成肉に非ず、故に身躰の缺乏困苦は毫も感ずる所に非ず、又人間は皆各其道德を異にすれば其属すべき階級多くあり皆各夫れ々々の運命に適する者なり、故に下等の者は遷て上等の者の運命に與かる能はず、是れ皆運命或は絶對の預定ありて人の如何ともする能はざる者なりとす

其異なる點

以上は「ノスタック」諸派の相一致する所あるが、其互に異なる點も亦少しとせず、例へば二元論を主張するの度異なる者あり、シリアの「ノスタック」はアレキサンドリアの者よりも二元論に傾くと多し、又或る者は印度

派

マニケアン

の凡神論の風に從て物質界を以て空虚夢幻の如き者として「エオン」界即ち實在圓滿の世界と全く相反對する者と思考し、之に反對する人は物質界に幾分か作動的の性質を附し、上より生命の入來するとなきも尙進で自ら惡の働を爲すの力ある物と思考す、又或る者は舊約の猶太教に敵するを他の者よりも甚しからず、故に又エホバを以て實際惡者なりとする者あれば、又之を以て單に制限ある存在者にして上位の能力者の意を不知不識行ふに過すとする者あり、又聖書を用ゆるに於て「ノスタック」派は一般に氣隨氣儘に爲すと雖も或る者は重に遠方より寓意を携へ來りて己の意を主張するを常とし、又或る者は直ちに聖書の大部を却け其餘を以て己の意に適する様工夫するなり、又其道德に於ては彼等の互に異なる處實に著るしき者あり、一方は世界を輕視し嚴格ある制慾的の生活を善とし、又一方の者は放逸蕩情にして極端の滅法論(譯者云く救主の贖を得たる者は最早律法を守るに及ばすと云ふ者之なり)に陥れり、



及基督教の相混せし者あり、然れども其通常の「ノスタック」と異なる所の基督教の思想を用ゆるの少きと、其過激なる唯理論ナチオナリズムを主張すると及び其組織の稍々完全なると等なり

モナキアン派。二世紀の終と三世紀の六七十年頃の間、當て一種類の「モナキアン」派即ち非三一論者顯れ出たり（アロシアンアロシアンの派は知る者少なければ之を除く）其一種のセオドテス、アテナモン等の代表する所なり此兩人は殆ど二百年の頃に當て羅馬に於て刑せらる、而して此派は遂にサモサタのポリロに於て歸結せり、ポリロの罪せられてアンテオケの監督職を剝奪せられたるとは即ち二百六十九年に在り、他の一種の派は所謂「パトリシアン」(父苦むの意)と呼ばるる者にして二世紀の終に羅馬に於て、パトリシアンを以て起り又ノエタスに依て代表せらるベラスも亦此派あるが如し而して遂にサベリアスに至て歸結したりサベリアスハ二百六十二年にアレキサンドリアに於て放逐せられたり

「モナキアン」派の勢力は只或る地方にのみ限られ之に従ふ者も亦甚だ多か

らざるが如し、而して此派は同時に二様の性質を以て顯れ出たるの事實と其派の人々が至る處に罪せられたるの事實を以て見れば此派は教會の傳説より生じたる者に非ずして寧ろ基督教説教中の難點を推想的に解し去らんとする企圖より生せし者なるや明かり

サモサタのポリロとサベリアスとの各其派を代表する尤も有名ある者なり、兩人共お神の身位ポシツの唯一なるを稱せ、是れ「モナキアン」派に普通の説なり然れども此一身位の神は果して成肉せしや否やの間に答ふるに當て兩派各異なれりポリロは其學派の祖先と同一之を否拒す、其教に依れば基督教の其超自然の生誕を爲せる以前には絶へて存在し玉はず、勿論神は或る度迄は基督の内に居玉へども其身位の一要素として實在し玉ふに非ず、神の基督の内に居給ふの意即ち彼に智慧を與へ又力を與へて万人に優れしむるに在り基督は其實一個の人間なるも此優渥なる天賦と又高尙ある天職とを以て神の尊位を得玉へりと云ふに在り、サベリアスは此に反してアラキアス、シノニス等と同一一身位の神は基督の内に居玉

へしは決して天賦の法に依るに非ず、其實在の中心たる要素なり而して基督の内在する人性は只此神たる身位を圍繞せる者に過ぎずとなすサベリアスは又三位説を唱へざるふ非ずと雖ども只其顯現に三様あるを稱するあり、神が外部に向て動き宇宙の創造者又統治者として顯はるる時換言すれば其普通天啓は於ては則ち「ロゴス」ありとす而して特殊な律法に於て顯はれ、贖罪の準備に於て顯はれ、又信徒の成聖は於て顯はるる時は則ち父子聖靈なりとす、此三種の號は神の性質は三様あるを示す者に非ず其攝理の三階級にして即ち同一身位の神が三様に其顯現を爲せるを示す者なり、故に基督中の人性は只器械にして神性を遷り往かしむるの用を爲すのみ、斯くの如くして成肉の意味は神人の合躰せる意に非ずして寧ろ神現の意とされり夫れ歴史上の基督ある意を斯くの如く省察するときはサベリアスの説も亦其起始は異なりと雖ども遂に「エビオン」派に陥るを免れず、ドルナー氏曰くサベリアスが基督の天啓を以て唯方便ありとせし、又基督自身も亦目的に非ずとする點は實に基督を輕視する者にして

てエビオン派に近づける者なりと  
夫れ二世紀及び三世紀の文學が吾人に證するが如く「ノスタック」派及び「モナーキアン」派の如きハ聖公會を勵まして基督敎理を確實に組織するに至らしめたるに明かなり、猶太のエビオン派は當時注意せらるるに於て僅かにして前の兩派の如く大に人心を引かざりしが如し

第三節 著述家及び其著書

人名	眞成の著書	接近せる年代
(第一) 使徒師父 クレメント、ローマの監督(Clement.) イグネシアスの監督(Ignatius.) ポリカール、スムルナの監督(Polycarp.) バルナバス(Barnabas.)	コリント人に送れる第一の書翰 七つの書翰(ボミアンの訂正) 腓利比人に送るの書翰	紀元後 九十二年—百〇一年 百七年—百十六年 イグネシアスの書に後ると少し 百年—百五十年

第一期 敎理發達の要素

四十七

初代三世紀の著述家の類別

ヘーラス(Heras.)  
記者不明  
パピスの啓蒙  
(Papias.)  
ローマスの牧者(寓意的の書)  
マイオグテマスに送るの書  
主の論託の説明(其數言のみ今日に現存す)  
百年—百四十年  
全—全  
百二十年—百六十年

(第二) 第二世紀の辨明家

ジャステン、マーター  
(Justin Martyr.)  
タチアン(Tatian.)  
アテナゴラス(Athenagoras.)  
テオドロスの啓蒙  
(Theophilus.)  
クワドリンタス(Quadratus.)  
アリクテ(Aristo.)  
メリト、クラウジウス  
(Melito; Claudius.)  
アポリナリス(Apollinaris.)  
アンキサン、ドリアの希臘語の著述  
辨解一、全二、トリポリトの會話籍  
ギリシヤ人に告ぐる演説  
キリスト教徒の爲に辨解す、復活を論ず  
「アウトリカス」に與ふるの書  
断片  
全  
重に断片  
全  
百三十八年—百六十六年  
百五十年頃  
百七十年—百八十年  
百六十八年—百八十八年  
百十七年—百三十八年  
百六十年—百八十年  
全

の啓蒙  
の著述家  
の著述家

エレメント(Element.)  
オリゲン(Oriegen.)  
ディオニシウス(Dionysius.)  
他の希臘語の著述家  
勸説。教育者。雜説。富人  
「テ、プリンシピス」セルソス  
を駁す。舊新約註解  
大切なる断片  
百九年—二百〇二年  
二百十年—二百五十四年  
二百四十八年—二百六十四年

(第四) 他の希臘語の著述家

グロテリウス、タウマツルギス  
(Gregory Thaumaturgus.)  
メソドウス(Methodius.)  
信仰の告白。讃詞。正經の書翰  
處女の宴。  
二百四十四年—二百七十年  
三百十一年以前

(第五) 希臘風のラテン語著述家

イレニアス(Irenaeus.)  
ヒッポリタス(Hippolytus.)  
異端を駁する五書  
「フロロンホメナ」。基督及び敵基督。ノエタ  
ンを駁す  
百八十年—百九十年  
二百十年—二百三十六年

(第六) ラテン語の著述家

タリタリアン(Tertullian.)  
ミニシアヌス、フェリクス  
(Minucius Felix.)  
シプリアン(Cyprian.)  
「オクダヒオヌス」  
諸書翰。教會の一致を論ず。  
百九十年—二百二十年  
二百十年—二百五十年  
二百四十五年—二百五十八年

第一期 教理發達の要素

三位論。猶太の食物

二百五十年—二百六十年

「マドマータス、ゼンタス」

二百九十五年—三百五年

神の制度。神の怒。神の事業。迫害者の死状

三百十五年—三百二十五年

ノヴァチアノ(Novatian.)  
アキノビウス(Ariobius.)  
ラクタンティアヌス(Lactantius.)

(以上の諸書を引用するに當て普通其ラテン語の書を用ひたり則ちタシヤ  
ンの書を"Oratio ad Graecos."と云ひマテナコラスの辨解を"Legatio"と云ひマ  
テピロスの書を引用するに當ては"ad autolycum"と云ひクレメントの「勸説」  
及び「教育者」を稱して"Cohortatio." "Paedagogus"と云(り)

ロマのクレメントより傳はり來れる者にして真に其手よ成りしとして疑  
なき者は只其哥林多人に送れる書翰一あるのみ其第二の書翰は之より短  
く又クレメントの名を有すと雖ども、此書翰を關してはエーセピアス以  
前の著述者敢て「言を云ふ者なし、加之エーセピアスも亦次の如く不明  
の言辭を以て此書翰のとを記せり、曰く「吾人は此書翰は第一の書翰の如  
く人よ尊ばれたるを知らず、又吾人は此書の昔時に用ゐられたるや否や  
を知らず」(II.38)又此書の形狀及び實質を見るに共に書翰に非ずして寧

クレメント  
の書

ろ説教なりしと明なり、又クレメントの名を以て贋造せる書の尤も有名  
なるは「Homilies」及び「Recognitions」なりとす、後者は正當説を去ると前書  
よりも遠からず、此等の外に又偽クレメント文集内には處女よ關する二  
の書翰あり「リリア語の聖書譯中に發見せらる又偽エレーア集中は多く  
命令的の書翰あり、クレメントは又彼の所謂 Apostical constitutions なる書と  
關係ある者とせられたり、此書の八巻は重に徳義教戒及び禮拜等を論ず  
るものにして大略三世紀の終りと四世紀の初との間に成れる者と信せら  
る、

イグナチアヌの名を有する書翰十五あり其八部は其文牒及び論旨を見て  
も贋造たるを知るべし、又六世紀に至る迄は此等の書翰を引用せし者な  
きを見ても之を知るべきなり、其餘の者は訂正して長くせし者もあり、  
或は短くせし者もあり而して其中の三は尤も短き形を以て「リリア語の譯  
書中にありき、近代の批評の傾向及び證據の跡は訂正して短くしたる者  
を以て實に之れイグナチアヌの殘したる形なりとするに至れり

イグナチア  
ヌの書

マルナバ

ハーマス

ハーマス

ハーマス

マルナバの名を有する書翰の記者は使徒保羅の有名なる同伴者マルナバに非ざることには一般に知る所なり、ハーマスは關するの推測は多くは臆説に過ぎず、二世紀の後半に出たる『ハーマスの正經』なる書の記者はハーマスを以てロマの監督パイアスの兄弟ありとせしめ、是れハーマスを二世紀の中頃の人とあす者あり、然れども或る歴史家はハーマスの書中より推理して之を以てロマノクレメントと同代の人ありとせしむ。

マヤスタン  
マヤスター

「十二使徒教訓」なる書は近來發見せられたる者にして真正の證據多くあり、其年代は使徒師父の文學等と同時代の者あると明かなり、マヤスターの筆に由て成れる三書は疑ふべくもあらざるが、此外彼の名を以てせる書多くあり或人は此等の諸書を以て眞にマヤスタンの手に成れる者とあす、即ち(Address to the Greeks)(Hortatory address to the Greeks)(Sole Government of God)の如き或は又其復活論の斷片の如き是あり、然れども多くの批評家は後の二書を以て彼の眞著に非すとあす。

タリタリア

ヒツポリタ  
ス  
ノハシアン

タリタリアは教會の師父中に數ふるを以て適當とす、何とされば其吾人に遺したる一書は彼が未だ「ノステック」派と連結せざる以前に記せる者なればあり、タリタリアの書は彼のモンタニ派に加入せし以前に成れる者と其以後に成れる者とは區別せざる可らず、然れども此區別の教理歴史に於ては左程必要の者に非ず、蓋し以前に成りし者も以後に成りし者も神學の重要なる問題に於ては大差違なく、而してモンタニ派が彼の教訓上に影響を及ぼせる者ありと雖も、畢竟先に氏の心内に存せる特質及び傾向を單に強くしたるに過ぎざればなり、ヒツポリタス及びノハシアン兩人は當時正當神學の代表者とも云ふべき人あり、左れども兩人共にロマの教理に反抗しノハシアンの如きは遂に教會分離の首唱者となれる者あり、彼が分離の理由とする處はロマ監督等の教令の緩慢なるにありとす、ヒツポリタスも又之を訴ふるのみならず、監督セフヒリナス及びカリスタス等が父苦説の異端を保護するを以て分離

アーノピア  
ス、  
ラクタン  
クス

以上の著述  
家等の特質

の理由となせり、ヒツポリタスは博學の人にして西方に於ては教理學者の重なる者としてアイレニアス、タータリアン等と伍を同ふしたる者あり。アーノピアス及びラクタンシアスの兩人は成人に至る迄異教徒にして其基督教徒と成れる後も全く其教説を了解し悉くすに至らざりしが如し、故に彼等の著書は或る制限なくしては當時教理の代表とあるものと能はざりしあり。

以上挙げたる著述家の類書中使徒師父は重に實際的の事を論じ推想的の事は其著書中に甚だ少し其言は大概一人或は教會の生命の事に關す、然れども數々教理の點に觸るゝ事なしとせず、而して彼等の使徒時代に接近するを以て其證言は實に價値ある者なり、シヤスタン、マーター及び他の辨解家等は重に推想的の傾向を有し、明確に基督教の教理を防衛し又組織せんと務めたり、是れ蓋し彼等が基督教に來る前に希臘哲學を熟知したるに依る者とす、初代アレキサンドリア學校の傾向は尙一層智識的あり、殊にオリゼンの如きは殆ど極端なる理論的に流れたり、然れど

も同時に彼等よりして初代基督教思想の最良なる者生じ來り、又其説の如きも推想に乏き著述家の説と能く相對して益を與へしこと甚だ多し、ラテン教會よては智力的の傾向を顯はせる者少からずと雖ども概して云ふときは西方は東方よりも哲學的の性質乏く、其特點とする所は行政のことにより、從て人間學、救拯學等の如き實際の利害に關する教理を大に研究せり、シテリアンの如きは此時期中行政の希望と能力とを有する代表者にして尤も有名なり

#### 第四節 聖書及び傳説

第一、正經

使徒等より直接に繼續せる著述家の皆聖經を以て舊約の諸書を指して云ふ者となせり、勿論彼等は使徒等の諸書を多少熟知し又之を以て動かす可らざる新約の眞理なりと思考せしや疑ひあしと雖も、未だ之を舊約に對して立つ處の新約聖書と做して之を神聖ある諸書の表中に入ると至らざりしなり、蓋し使徒文學の範圍を適當に了解し其孰れか果して彼等の

聖書なる語  
の意味

舊約書の定限

眞著にして孰れか偽書なるか正確に決せんには先づ教會と教會と相通じ、基督教國の此の部と他の部と相問合はするの必要ありしが故に使徒師父の時代は未だ今の新約諸書を以て正經と見做すに至らざりしあり又舊約全書の定限に關しても初代教會にては已に討議問究するの機會ありしが、始めは此機會を用ゆる者なく舊約聖書も之と附近せる諸書も一樣に神の靈化を蒙れる者として之を引照したり、此等附近せる諸書と多くは基督の時代に顯はれ出で、パレスタインのユダヤ人の左程之を尊ばざりしかどもアレキサンドリアの猶太人の大に之を重じたり、左れども彼等と雖も亦適當に正經と云ふ可き者と此等の諸書とを明に區別せしが如し、即ち「ハイロー」の如きは必ず此等の諸書を熟知せしに相違なきも其猶太人の聖書を云ふに當ては曾て此等に引照せしを見ず、此れ正經と此等の諸書とを區別したるが爲なる可し、然るに基督教徒は却て此區別を明にせざりき、是れ蓋し彼等の多數の希伯來語を知らざりかば明に昔の原書と後世の附書との間に區別あるを知る能はず、且つ又兩者共

眞正の定限を定むるの企圖

ふ希臘語の七十人譯ある一卷の書中に見るを得たれば自然其區別をさざるに至れる者あり、是は依て基督教著述家等の吾人が今日一般に不經の書と稱する所の諸書より引用したると多し、此等の書は「ソロモンの智」、「エクレシアステカス」、「トビット」、「ユデツ」、「マラク」及び「マカベ」の諸書等なり、又或るときには七十人譯中に在らざる諸書をも經典の如く認識したることあり、例へば「エツラの第四書」及び其獸示録（共にキリスト教徒の時代に顯はれ出でたる者ならん）の如きは「マルナバ」の書翰中にも又「アレキサンドリア」のクレメントの書中にも共に引用せられたり、又「イタリアン」の如き人も猶太人が其聖經中より「エノクの書」を却けしは大きな誤なりと云へり

基督教著書家等が舊約聖書を適當に確定せんと企てしは漸く二世紀の後半に在りき、百七十年の頃に當てサルデスの監督メリトはパレスタインに於て此問題を討究せり、而して其兄弟オチシモスに送れる書中に舊約聖書の表あり、之を見るにエステルは書を除くの外は希伯來聖書中のみ在

る者悉く其中にあり、而して其他に一書をも加へたるを見ず、其後オリゼンも亦是と同表を造れり唯エレミアの書中に彼のエレミアの書翰ある者を探入せり、左れどオリゼンは慥かに彼の不經の諸書中にも亦正經中に加ふるの價值ある者ありとし猶太人が之を退けたるは全く其誤謬と僻説とに依るとせり、然ども一度希伯來正經と後に附加せし諸書との間に區別されしや否や、其勢次第に増加し特に希臘教會に於て甚だしく第四世の頃に至ては希臘師父等は一般に希伯來聖書中に加ふるに唯エレミアの書翰とバラククの書のみを以てするに及べり

「ラテン」師父等の内にて殊に希臘文學を熟知せる者は不經の諸書を明瞭に區別したり、即ちポイタースのヒラレリの如きルフィナスの如き或はジョエロームの如き其例なりとす、之に反してアウガスタン及び氏の臨席したる數多の大會議に於てハッロモンの智「エクレシヤス」、「トビット」、「マテウス」及び「マカビースの二書」を以て明に正經中に加ふることを決せり、之と同時にローマの監督も亦同判決をさせり、斯くの如き決議ありし

ギリシア教會及びラテン教會が遂に決したる決定

新約聖經を定限せんとする刺動力

を見ればラテン教會は一般に以上の不經の諸書を許容せしことを知るべし、左れども年を経るに従てラテン教會中にも是等を以て正經とあすの價值なしとする學者諸所に起れり、大グレゴリーの如き人も亦「マカビースの第一書」を以て正經中に置く可き者なるや否やを疑ひたり、(尙ジョー、ガトハーロ氏の編集せる「アポクリファ」を攻撃せる人々の表を參見すべし)使徒時代を去ること益々遠く其傳説益々疑を容れ易くなるに従て自然と使徒の文學の範圍を確定し以て新約の聖書を定限せんとする必要を感ずる者多く出でたり、之に加ふるに異端者の輩頻りに起て使徒の諸書を截斷し、改作し或は増減する者ありしかば其必要愈々急ありき、マリーシオンは路加の書を改作し、其他の新約諸書を却け、只保羅の十書を受け納れたり、ヒッポリタス會て「埃及人の福音」なる書あるを記す、此書極めて初代に成れる者の如し、アイレニアスは「バレンテニアン」派なるマコーシアンスを論ずるに當て曰く「彼等は數ふ可らざる程僞假の諸書を引證と、是れ皆彼等が愚人を欺き眞の聖書を知らざる者の心を亂さん爲めに偽造せ



る者なり」(Cont. Har., 1. 20. 1)オリゼンも亦曰く「教會は四つの福音書を有す、左れど異端者は多くの福音書を有せり、其一を埃及人の福音と云ひ、其一を十二使徒の福音と云ふ、パシライドも亦福音書を著し己れの名を以て之に名けたり、又我が知る處にてはトマストマスの福音もあれば、マタイアスの福音もあり」と(In Luc., Hom. 1.)勿論異端派と雖ども新約諸書の眞に使徒等の手お成れるを承認せしや疑ひあし、是れ即ち證據論中に於て彼等の證言の緊要なる所以なり、然れども彼等異端者の舉動ハ甚だ擅なると多ければ聖公會お於ては正經を確定せんとの熱望を是よ依て生ぜしなり

二世紀の中葉に至て已に今日吾人の有する新約書の大畧は正經として認識せられたるが如し、此時より以前に當ても已に教會の禮拜に於て朗讀する者を編集せる者あり、只其孰れを容れ孰れを省きしやを知る可らざるのみ、ヨヤステン、マーターは其早く著はせる書中に基督教徒が一週の初日に當て相會して「使徒の遺訓」を讀むを以て習慣となせるを記したり、又彼の「ムワトリの正經」なる者の百七十年頃に成れる者おして今其斷片を

今日の  
新約  
書の大  
部は  
初代一  
般に  
承認せ  
られた  
り

得るのミおれども尙吾人に示すに當時の基督教徒は實お四福音書と使徒行傳と黙示録及び殆ど凡ての書翰を受けたるを以てす、又此文書中にハ彼得の黙示録と云ふ不經の書を唯一つ加へたり然れども是は當時普通に受けたる者に非すと云へり夫れアレキサンドリア、アレキサンドリアのクレメント、タリタリオン等の著書は當時の教會廣しと雖ども悉く之を代表するに足る者なるが此等の皆同様の編集を以て當時一般お承認せられたる者となす、畢竟するに吾人は以上の多くの證言よりして左の如く結論するを得べし、曰く公教會(當時基督教徒の大脉を指して云ふ)は二世紀の後半に於て已お四福音書使徒行傳保羅の十三の書翰約翰の第一書、彼得ハ第一書等を疑はずして受け、而して又今日吾人が不經の書と云ふ者は一つも之を受けざりしなりと

以上列記したる四福音書以下の諸書を除ては黙示録尤も廣く引用せらる、アレキサンドリアのダイオニシアスを除くの外は此書の使徒の手に成るを疑ふ師父或ハ教會おらざるなり、ダイオニシアスは此書を以て約翰と

幾分か疑は  
れたる書

名くる他の聖人靈化を受けて作れる者にして使徒約翰の作に非すとせり、四世紀の希臘教會師父の中にも此説に従ふ者あり、然れどもアタナシウス等の其使徒の手に成れる者なることを論じ、五世紀に至りてはギリシア教會一般に之を承認せり、希伯來書はギリシア教會の大に尊ぶ所にして數々保羅の作として引照せられたり、オリセンも然か云へり左れを細密に云ふときはオリセンは之を以て其實質のみ保羅の者にして之を記したる者は其直弟子なりとせるが如し、ラタン教會の初め此書に注意せざりし乎然らざれば之を使徒の手に成れる者に非すとせるが如し、然れどもアウガスタン、ジェロームの時より後はラタン教會も全く之を承認して正經中に置くに至りき、猶太書及び約翰の第二、第三書はユーセピウス、オリセン等の證するが如く之を受けざる者ありしが、初め三世紀間の著述家等は各箇に云ふときは皆之を認めたりと云ふべく、概して云ふときは教會中ふ之を却くるの傾向なかりしと云ふ可し、雅各の書と彼得の後書とは共に初代著述家中に之を認識する者少なかりしが故にユ

現今の聖書  
の一般に受  
けられたる  
時日

聖經内に包  
有せられさ  
る書

ユーセピウス及び其他の人々も之を疑ひたり、左れを四世紀の終りお至て教會は皆此等の書を以て悉く正經とせし以て今日吾人の有する新約全書を完成するに至れり  
今日の正經に加ふるに尙數多の書を以てし之を全く或は半ば正經の性質を附與したるは或る時代の間或る一部の教會お於て行はれたりユーセピアスの證する處に依ればロマのクレメントの書翰は多年間多數の教會の讀む處とされり、只之を以て使徒の書と同等の位地に置きしや否やを知らざるのみ、アレキサンドリアのクレメントはバルナバの書翰を以て使徒バルナバの手に成る者となし、之に聖經の性質を歸したり、オリセンも亦殆ど之と同等の尊敬を此書に呈せり、此兩人は又ハーモスの「牧師」を尊んで之に高度の權力を賦せり、又ユラトリの正經にては彼得の黙示録を載せて聖經となせしは已お配せし處なり、ユーセピウスに依ればアレキサンドリアのクレメントも亦其註解せる聖書中に彼得の黙示録を含めり、然れども此等の書中一として一般の憑據に依りて聖經の性質を賦

せし者亦く、暫時ふして皆其信用を失へり、之に反して新約正經の他の大部は初めよりして教會の一樣に承け納れたる所なり

第二、聖書の靈化及び憑據。

フハイローの著書を見るときは基督教時代の最初より於て早く已に聖書の靈化に關して甚だ嚴固なる説の存せしことを知るに足る、フハイローのアレキサンドリアの猶太文學の尤も高尚なる者を代表する人あるが、其説に依れば預言者は天啓を與ふる神の手中に在て全く受働的の器械なり、又七十人譯の聖書と雖も其一言一句皆神靈に感せざるはなしと云へり、彼れは又人間の性質は神の靈に感ずるに當て下層に潜伏し喪神して全く働きを止むるを論じて曰く「神の光明輝くときは人間の光明没す、神の光明没するときに人間の光明登り輝く、是れ預言者等に數々ありしことなり、吾人の内にある心意の神の靈來るに及んで其處を去り、又神の靈去るに及んで其元處に復す、蓋し死すべき者と死す可らざる者と共に居るは聖なる律法の許さざる所なればなり」と (Heir to Divine things, III. ; Life of

靈化の説の猶太教より傳はる

尤も初代の基督教徒の説

Moses. BK. II Chap, V-VII, ; Rewards and punishments, IX, translation by C. D. Yonge.)

初代基督教著述家にして聖書の靈化の問題を論せし者は皆フハイローの説と類似す、ヨヤステン、マーターは曰く「預言者の言説は彼等自身の者に非ず、即ち彼等を感動する神の言説なり」と又氏の書と見做されたる「コホアアジョ」には預言者の靈魂を琴に比較し而して聖靈は恰も神の撥の如き者にして其上お降て以て超人的の唱和を奏する者なりとなせり、アセナゴラスも亦同じく神より來る靈は預言者の口を感動せしむると恰も樂器に於けるが如しと云ひ、又聖靈はモーセ、エザア、エレミア及び他の預言者等を喪神の狀に擧ぐ、其意をして自然以上の作用をなさしめ、恰も笛吹く人が笛に其氣を嘘入するが如くして彼等を用ひたりとも云へり以上陳述せる所に依て彼等は靈感せし人は全く受働的にして自覺力を失ふとの説を取る者ありと斷定するは少しく嫌なきに非ず、初代教會中に斯かる説を明に主張するは即ち「モンタニ」派の特質ありとす、タータリアンはモンタニ派の人なれば彼得が變貌の山に在て己れの言ひしことを知

モンタニ派の説

らざりし狀を註解するに當て左の如く言へり曰く「彼得が知らざりしは單に誤謬の結果なるや、是れ或は激悦の狀に於て全く自失したるが爲に非ざる乎、夫れ人は聖靈を以て打たるゝ時は、殊に神の榮光を見る時、或は神が彼に依て語り給ふの時は必然感覺を失ひ神の力も全く隠蔽せらる可きなり、此點ハ吾人と肉情を有する人々との間に存する疑問なり」と、(Adv. Marc., I V. 22)

モンタニ派  
興起の後其  
督教の取り  
たる説

タータリアンの云ふ處の肉情の人とは即ち非モンタニ派にして彼が用ゆる熟語より考ふれば公教會を指す者なり、是れ依て考ふれば公教會は少くともモンタニ派の起れる後は靈化を受くるの狀態は喪神の狀にして感覺も自覺力も全く消失する者なりとの理論は反對せること明なり、オリゼンは殊に此説に反する者にして靈化は之を受くる者の自然の能力を高めし、之を活かす者ありとの説を取れり、之のみならずオリゼンは靈化を受くるは道德上の性質に親密なる關係あるを示せり、ピチアンの女僧預言するに當て全く自失するの事實ありければ、オリゼンハ之を以て女

僧の心は悪魔に依て暗まざるゝの證となし、神の働きの結果は決して斯くの如き者も非すとせり、曰く「猶太の預言者は其預言の業に必要な丈け神の靈に照らされたる者にして是れ靈化を受けたる者の初めなり、彼等は神の靈と接するも及で其心以前よりも明かに成り、其靈魂益々赫々たる光明を以て満たさるゝに至る……彼等は聖靈を受けて其聖ある託宣を傳へん爲に撰まれたる者なり、而して其撰まれたるは彼等の生活高尚に其道德秀逸にして殆ど人の近く能はざる程あればなり」と (Cont. Cel., VII. 47)

モンタニ派の説は二世紀の末に至て退けられたるも、尙基督教著述家の内には聖書の靈化に關して甚だ獨斷的思想を有する者多し、アイレニウスは曰く「聖書は神の道及び聖靈に依て教へらるる者ある以上は之を完全ある者と爲さざる可らず」と、アレキサンドリアのクレメントは明瞭に言ひ顯はさるゝしかども聖經記者の器械的なるを強く論ずるが如し、オリゼンは或る所に於て預言者は神より天啓の實質を受けて之を己れの

言語を以て被ふたりとの思想を有するが如く見ゆと雖ども、尙其註解の全脈を見れば一言一句に重きを置き、又聖書の最少の款條中に深遠の意味を含ましむるを見れば實に字義上の靈化説を取りしこと明なるが如し、概して云ふ時は當時の傾向は靈化は管に天啓の大趣意にのみ限らず、其使用する言辭にまで及ぶとるにありしこと疑なし

以上引照せる著述家の内尤も、初代に住せるツアスタン、アテナゴラス等は靈化の問題を論ずるに當て其心中に直に舊約聖書を指して云ひし者なれども、一度使徒の著書を蒐集して正經と認むるに及では舊約聖書に當て欲めたる理論は亦自然に新約にも應用せられたる可し、アイレニアス、タータリアン、アレキサンドリアのクレメント及びオリセン等の如きは實に兩約の單一なるを主張し、又靈化の説も兩約共に均しき者となせり聖書に關して無誤無謬の靈化説を取る者は勿論聖書の憑據も亦無限完全にして測る可らざる價值を有すとの説を含蓄するなり、アイレニアスは四福音を呼で教會の四本柱と云へり、ツプリアンは聖靈を以て神の盛徳の

泉となす、アレキサンドリアのクレメントは曰く「神の聖書と智慧の制度とは教に至る捷路なり」と、オリセンは聖書の記録を以て單に歴史上の事にして今は吾人の幸福と救済に正面の關係なしとるを以て不敬神の感情なりとて之を却け、蹟く石の下にても尙或る善の存するあり、「若し夫れ吾人にして尙虚妄無益の言語を發す可らずと命せらるゝ時は増して預言者に於てをや、是に依て見れば彼等の口頭より出づる凡ての言語は靈驗あるものとせざる可らず」と云へり(In Num. Hom., XXVII. 2.; In Jer. Hom., XXXIX.)

第三、聖書の解釋及び其使用。

當時聖書の註釋は甚だ幼稚なりしと雖ども尙正確なる釋義學の原則を言顯したる者少しとせず例へばアレキサンドリアのクレメントの聖書は之を聖書と相對比し而して其大脉の組織を契合する解説を取らざる可らずとの原理を教へたり、アイレニアスも亦「ノステック」派が濫りに聖書の句を切斷し其連絡を絶ち恣に之を申束するを抗撃するに當て同原理を主張

釋義學上の  
原則

せしことあり、ターリアンも亦マーニオンが聖書の冬部より神の愛なる性徳に撞着するが如く見ゆる者を悉く擲去するを咎め云て曰く「類推に依て吾人は自然界の天啓に反對矛盾の状充滿する以上は記録天啓にも亦之あるを預期せざる可らざるを知る」と

初代基督教徒の解釋の大誤謬

初代の釋義學に於て一の明白ある誤謬と云ふべき者は一般に寓意的解説に傾きたるにありとす、而してオリゼンを以て此傾向の極端に走れる者とあす、氏の常に主張する所に依るに唯文字の上のみ依頼する時は遂に眞正の糧を得る能はず核、精神則ち適當なる食物は外物の包被外に存す「人は身軀心意及び靈魂より成るが如く聖書も亦然り」、其各部皆靈の意味を有せざるなく、而して又軀の意味を附する能はざる章句も又なきに非ず、或る時は文字通りに受取る可らざる言を多く搜入したることあり、又福音記者は其記録せし所歴史上の順序に異なる者あり、而して若し靈の意味と軀の意味と兩つながら之を保全する能はざる場合にハ軀の意味を棄てざる可らず、左れを歴史上の意味に於て眞實なる章句は純粹に靈

通常の人も自由に聖書を讀むを許されたる證

の意味を有する章句よりも其數甚だ多し」(De Bin., Bk IV., Chap. I, 11-20., In Joan., Hom., X. 4.)

聖書の使用を見るに此時期中お於ては如何なる階級の人も之を讀みたりとは云ふ可らず、寫本の足らざるを教育の盛ならざるとよりして之を讀む能はざりし者甚だ多かりしならん、然れども一般に云ふときハ聖書を讀む者其數甚だ多しと云ふも敢て過言に非ず、聖書は實に僧侶にも俗人にも共に授けられたる者ありとせりジヤスタン、マーメーの如きは異教徒にも聖書を熟讀し之を用ゆるの權を取らんことを勧めたり、ターリアンの勸言にも亦曰く「吾人の聖書を鑿索せよ、之れ決して隠蔽する者に非ず、是れ數々吾人と與ならざる者の手に入る可きことあり」(Apol XXXI.)オリゼンは希臘學者の反對に答へて聖書の質朴なる文を以て記せるを辯護するに當て是れ蓋し凡ての人の爲に記せる者あればありと云へり、彼又曰く我等の預言者及びイエス、キリスト、其使徒等は其言語文章を使用するに當て眞理を顯はそを目的とせず、多衆に之を適用せしめんとし玉へる

者あり」(Cont. Cel. VII. 2)オリゼンの書を見るに當時の人々は聖書を一般に讀むを許されたるのみならず又必要とせられたるを證するに足る第四、聖經と傳説の關係。

新約書未だ編成せられざりし時は傳説重を占む

先づ新約正經の定限に關して陳述したる事實より推考するときは當時多年の間は正經の未だ定まらざりし時なれば只口に發する言語にのみ依頼したると明かなり、而して使徒の書の眞成なるを證するに至ては單に使徒に繼續せる者の證言に依るの外おかりき、又當時一般に承認せられ且つ廣く渡れる新約書なる者未だ有らざりしかバ口傳の傳達は成文の傳達よりも一層便利ありき、アイレニアスの時に及でも尙其云ふ所を聞くにキリストを信する國人の多くは紙墨に依らず聖靈に依て其心中に寫されたる救を有せり、(III. 2)之を以て見ればアイレニアス以前の時代に於ては尙一層斯の如き有様にて有りしならん傳説とは即ち以上の如く言語に由て傳はり來る眞理を指して云ふ者なり、然り而して異端者の攻撃激烈なるに従て自然に傳説の教訓中にある主要

に付ての諸説

の點を成文となすの必要起り、爰に基督教信仰の要略ある者出で來り教會一般は之を承認したり、是其主意彼の使徒信經なる者と異なることあり、斯の如き類の要略を名けて信仰の規則 *regula fidei* と呼ぶ、信仰の規則は後年に至て確定せる信仰ヶ條なる者とは異なり、蓋し其實質は前後同一なりと雖も前の者ハ殊更に之を構造せざる者に非ず、又總會の如き者に於て認定せる者にもあらず、故に其用語の如きも決して不變に確定せしむ非ざるあり、左れども其使徒の教訓と全く相一致する者なりとの信任の當時一般に存せしむは其緒言を見ても知る可し、曰く「教會は萬國に散布し世の終りに至ると雖も此信仰を使徒及び其弟子より受く」と、又曰く「此信仰の規則は福音の始より我儕に傳はり來れる者にして何れの異端よりも尙早く來れり」と、又曰く「信仰の規則は全く一にして動す可らず又改む可らざる者なり」(Irenaeus, I. 10; Tertul. Adv. Orax. II.; De Velaud. Vir., I.)以上の如き言を以て見るときは信仰の規則は眞實の傳説に基く者にして成文の傳説とは稍離るゝが如し、勿論信仰の規則は傳説と同じき非ずと雖も

傳説が神を成して顯はれたる者にして尤も切要なりとす。此世紀の後半に於て新約正經の完成するに及では之に依て自ら傳説の地位も定まり、遂に成文の道の次に位するに至れり、左れど當時は兩者共に其實實に至るは同一なりと思考せしや疑ひなし、故にアイレニアスは使徒の福音書を以て信仰の柱礎とあさんが爲めに初めに之を宣傳し、後之を聖書に寫じたりと云へり、左れども成文の論証出づるに及では其明瞭確實なるを以て遙か傳説に勝れば自然之を以て標準とし、傳説に訴ふるよりは寧ろ聖書を訴ふるに至り、實際上は於ても又理論上にては聖經を初めと傳説を次にするの傾き稍顯はる。

然れども又翻て或る記録を見れば此傾向に反するが如く見ゆる者亦あきば非ず例へばアイレニアスは眞理が使徒よりして監督に傳はり、監督の繼續に依て漸々傳來する説を重じ、教理の問題を決する爲めに使徒の建てたる教會に諮詢すべき者あるを主張したり、然れどもアイレニアスが之を主張せるは敢て傳説を重んじ、聖經を輕んぞたるは非らず、只

聖經の  
地位

「エパツク派と戦ふに當て該派が聖書を擅に解説するを攻撃したる者あり、彼が此方向に強く進きたる所以は敢て理論上聖書の憑據を制限せんとに非ず只實際上之れを濫用する者の害を防がん爲なり、夫れ然り故に彼の聖經を引照すると夥しく之れを以て明に自身が聖書を以て重なる標準とあすを示したり、ターリアンも亦之と同じ彼れ會て或る所に「我等は聖書に訴ふ可らず」と云へり蓋しターリアンは聖書として受くべき者に關し異端者と争ひたれば第一訴ふべきは勿論聖書に非ず、誰れか果して眞正に使徒より傳はり來れる信仰の規則を有するやあり、蓋し之を有する者は眞正の聖書と其眞正の解説とを有する者と云ふ可ければあり、是を以てターリアンハ他の所に於て傳説は聖經よりも明確に非すと云へり、曰く「傳説は其基礎とする所は聖書の憑據を欠くに從て益々道理を附せざる可らず、而して遂に天の賜に依て確定せらるゝか或は矯正せらるゝに至て始めて價值ある者となる」と、又彼れ習慣の長かりし故を以て確實の證とあすを得ざるを論じて曰く「我等の主キリストは自ら呼で眞理



なりと云ひ、習慣なりとは云はざりき……苟も道理に反對の氣味ある者は假令古來の習慣なりと雖も之れ異端たるを免れず」と、(Develand, Vir., I.)  
 「イタリヤンが聖書を以て無二の證據となせしは其數々之を引用せるを以て知るべし」  
 「サントリアの學校にては當時一般の思想の傾向と同じく聖經と傳説との相矛盾する者に非ずして相符合する者ありと思惟せしも尙聖經を以て傳説の上に位せしめたるは明かなるが如し、クレメント云ひけるは「人は其云ふ所を證明する爲に聖經を讀むこと必要なり……苟も越群の討究を遂げんと欲する者は自ら聖經より證明を得る迄ハ真理を探て倦む可からず、……我等は疑問の事件を主の聲に依て定めざる可らず、主の聲は即ち凡ての證明中にて尤も正確なる者否寧ろ唯一の證明と云ふべきなり」(Strons, VI. 11, VII. 16.)オリセン亦云けるは我等は證言として聖經を持ち出さざる可らず、此途を以て證せざる解説も保證も共々信するに足らぬ者あり」と

論聖書の

定少カラスの記を見れば又左の如きあり、「宇宙に唯一の神あり、我等は之に關する智識を聖書より得る者にして他に之を知る根源一もあるなり……左れば聖書の命ずるとは何ありとも之を爲すべし聖書の教ゆるはどの何なりとも之れを學ぶべし」  
 「アリアンの精神は祭司政治的なれば自然傳説を重するあらんと思はるれども、彼がロマの監督ステフヘンと爭論するに當て成文の道は大に傳説に勝る者にして之に反することは苟なれども之を棄てざる可からずと云へり、故にステフヘンが傳説に訴へて異端の洗禮を受けたる者は再び洗禮を受けざる可らずと云へるを論ずるに曰く「其傳説とは果して何所より來れるや、主の憑據より來れる乎、福音の憑據より來れる乎、或は又使徒等の命令及び書翰より來れる乎、夫れ記されし者は之を爲さる可からずとは神の證明し又説論し玉ふ處なり、然るに人間の傳説を以て神の制規に更ゆるは如何なる頑迷ぞや、又如何なる臆測ぞや、而して人間の傳説が神の戒命を輕視し又看過する毎に神の震怒に遇はるを思はざるは果して何ぞや……又習慣は或人を繫縛

するも之をして真理の行はれて勝を制するに至るを妨げしむ可らず、蓋し真理なき習慣は是れ誤謬の遺物あり」と  
第三世紀及び四世紀に至ては聖書の釋義の上に大争論起り此間には傳説の地位は聖書に次ぐ者とせらる、加之二世紀の末ふ於ても已に傳説は聖書と同等の位を保つ能はざりしと云ふも過言に非ず而して其以前に當て之に比すれば幾分か傳説を重じたりと雖ども之れ決して不當の事非ず何とされば使徒教訓の起初の時代に近くみ從て傳説は正確にして信するに足る者ありければなり

秘密傳説の

傳説は是教會一般の共有物と思はれたり、左れ共アレキサンドリアのクレメントの如き者ありて秘密傳説の説を吐けり、彼曰く秘奥のことは之れを言語に由りて傳へ成文に由らず……gnosis(智識の意)は使徒の口づから教ゆる所にして只僅少の人にのみ傳はり來れりと然れども此の如き思想は一般の基督教の思想非ずして寧ろ「ノスタック」派の思想あり、正當教の大家にして斯の如く説きし者はクレメント唯一人ありとす、

第二章 神性論

第一節 神の存在 本質及び附性

(第一) 神の存在の證據。

神の存在及び性質に關する諸の大真理は議論に依りて證明するを要せず、是等の真理は自明の真理にして、之を一層明白ならしめんと企望は是れ人心の乖戻より起るとの感覺は初代の教會中に存せり、斯の如き感覺は恐らくは甚だ弘く行はれたるものなるべし、且つ承認するに足るべき真理は論證外に在るものにして尋常人に向ては之を論述するよりハ寧ろ敘述するを要するとの信仰を表白せる數多の言は眞に吾人の發見せる所あり、ジャヌナン、マーターは預言者に關して謂へるあり、曰「彼等は敢て論證を用ひず蓋し彼等は自ら論證の上に出で、信仰によつて知るに足るべき真理の證人なるを覺知すればあり」と (Dial. Cum typh., VII) 又曰「真理の言は自由にして且つ自己の權威を有する者されば如何なる老練ある議論も受ぐるを嫌ふものあり……真理よりも強く又信用するに足るべき

初代師父は  
真理は自明  
自證なりと  
の説を重んず

者は一としてあることなし故に真理の證據を求むるものは恰も五官に現はるる事物は何故に斯く現はるかを論證するを願ふ人の如し」と(De Rect. subject., I.)アレキサンドリアのクレメント曰く第一元理は論證し得ざる者なり、……神は論證の主意とあるものみならず、故に學術の目的たる能はず、……論證は凡て論證し能はざる信仰に基くなり、……宇宙の第一原因の知識は信仰にして論證に非ず」と(Strom. II, 4; 5; IV, 25; VIII, 3.)

右の思想に必然的に伴ふ者は人間の宗教的意識は證に基て神の存在を證せんとする思想なり即ち靈魂の正當の刺撃、其自發の確信、是等は神に付て證する者にして畢竟神の觀念は靈魂固有の者なりとの思想是なり、アレキサンドリアのクレメント曰く「創世紀に記載せられたる如く人間は他の動物よりは一層潔白なる本質を賦與せられたれば神の觀念に乏しきものにわらず」と(strom. v. 13)故に人は神の存在を知るには自己の意識を存するものを考究するに在り若人自己を知らば神をも知るべし(Paed., III, 1)氏は此知識を以て神より人の心へ流れ來たるものとなせり、換言せば自然の

神の  
自體  
を  
直覺  
する  
こと  
は  
自然  
の  
知識  
なり

太陽に非ずして心靈上の太陽即ち活ける言より流れ來る万人徧く有する所の光より出でたるものと語れり「如何となれば太陽は決して眞の神を我に示し能はざればなり、然れども健全なる言即ち我靈の太陽は之を示せり、彼靈魂の深室に登るときには靈魂の眼は獨り彼に依て輝くを得るなり」(cohort., VI.)、アイレニアスも亦神の知識を直覺的なりと證明せり、曰く「神の無形の本質は強大あるが故に其最も強き否全能なる偉大の性質に就て深遠ある心意上の眞覺を万人に賦與せり、故ふたとひ子の外に父を知るものなく父及子の現はせる者の外に子を知る者亦しと雖ども尙や心意に賦與せられたる理性は之を動かし又彰はす故に何人にも万民の主なる一神の存在する此一事を知る」と(H. S.)、ターリアンの議論に由れば心の内部の證據は明確にして何人も眞神を禮拜せざるの責を免るること能はずとす其言に曰く「何人の靈魂にても其固有の光に依りてキリスト教徒の公言する所を公言せざるものとはあらざるなり、然らば各々の靈魂は罪人あるが如くに又證人なり、靈魂は眞理に就て證明するの度に準

じて其罪過も輕重ありつべし而して審判の日には神の前に一言の辭なかる可し、あゝ靈魂よ爾神を公言せり然れども爾は神を知らんことを求めたりと(De Test. Animae. VI)「靈魂は預言の先にありしものなり、元始より神の知識は靈魂に與へられたる賜物あり、エジプト人スリア人及びボント人の中に在ても皆同一なり」(Adv. Marc. I. 10)「アーンピアスは人性に關しては下等なる理想を有するにも拘はらず、靈魂の中には神に關する本能的認識の存するを主張せり、

以上の如く人間の靈魂は生れながらにして神と親和を有する者とせられたれば自然と明瞭に神を知らんには罪の重荷と其心を蒙らす權力を脱すべしとの論に達せり、セオピラスの異教徒より「爾の神を我に示すべし」と謂れたるときに左の如く答へたり、曰若し爾の神を我に示すべしと云はば我之に答て曰はん、爾の人を我に示せ、然らば我れ我が神を爾に示すべし、爾の靈魂の眼は視、爾の心の耳は聞くの力ある乎を示すべし、人の靈魂も亦た明鏡の如くに潔白ならざる可らず、明鏡一度銹を生せば人の

万有よりの  
證據論

顔を寫すと能はず、斯の如く人心に罪惡存する時には其人神を視ると能はず」(Ad Autol., I. 2)アレキサンドリアのクレメント曰く若し爾眞に神を視んと欲せば神を視るに足るべき聖潔を以て方法とすべし、白毛と紫糸を以て織りたる挂冠の葉にあらず、義を以て爾の額に花輪を造り樽節の葉を以て之を圍み而して熱心にキリストを尋ねべし」(Cohort. I.)  
神の存在に關する第二の思想は万有より引照せる者なり万有中に現はるる權力、知慧、及び意匠は全智全能なる造物主及び主宰を明白に表はすものなり、初代の著述家は多く此證據に基て論せり、其中最も著名なるものハアレキサンドリアのデオニシアスの論なり、氏は世界は分子の偶然の配合に依りて成れりとの論を批評して曰星軍は隊伍を整へ相接して盾を取り、神速を極めて進行するを視れば斯の如くに列を正しくし先んずるものなく、後るものもなく、互に其進路の妨害をなさず、隊伍を亂ださずして旅行せる斯かる軍隊は嘗て存せしや、大將の指揮なく、互に他を知るの智識亦くも尙は完全なる訓知の中に衆星は各其行軍をなす是

二個反對の思想

れ如何なる事ぞ』(Adv. gent.; III)  
 後世アウグスティーン、アンセルム及デカート等の唱へたる哲學的の證據  
 論ハ初代三世紀の神學者の全く知らざる所なりき  
 (第二)神の本質及附性。  
 神の本質の論題に接近するに及びて初代の師父は二個反對の思想の勢力の  
 下にありき、即ち方に於て完<sup>○</sup>全<sup>○</sup>者<sup>○</sup>の禮拜者たらんと欲するより彼等は神  
 の超絶即ち知得すべからざる靈性及び偉大の性質を主として論せんとし、  
 又他方に於ては神の默示はキリスト教に於て完備したれば神を完全に知  
 るを得べしと唱へたり、神を以て人間の思想の及ばざる程の點に高むる  
 こと其結果として遂にキリスト教の啓示の力を輕んずるに至るべし、又  
 神を以て容易に了解するを得るとせば神の觀念を低くするに至るべし、  
 是等の二者の調和を謀るの事業は世々甚しき難事たることはキリスト教  
 の歴史に依りて明白あり、故にキリスト教ノ初代又在て此事業全く効を  
 奏せんことは得て望むべからざるなり

神の超絶を  
 強く主張せ  
 る傾向を  
 強くとす  
 向現出す

神の超絶的あるを主張するの傾向を彰はせる言數多あり或人は神は適宜  
 に名稱を附する能はずと云へりジャスタン、マーター曰く「何人も言ひ得ざ  
 る神に名稱を附する能はず、若し人ありて名稱存すと云はば是彼は狂  
 言を吐くものあり」(I Apol., IXI)セオピラスアレキサンドリアのクレメ  
 ント、ミヌシアス、フェリクス、ラクタンシアス及び其他の人々も之に類する  
 の言をなせり、是等の言の裏面に存する觀念を考ふるに神に適當する名  
 稱は地上の言語中に存するものに非ず、至尊の名稱も神の能力若くは形  
 狀の僅かに一部を表はすに過ぎずと云ふにあり、同一の傾向は神を以て  
 人間心意の適當ある了會を超越したるものなりとの言に依て一層明白に  
 證明せられたり、ミヌシアス、フェリクス曰「吾人の心は狹隘にして神を悟  
 ること能はず、吾人の神の測るべからざるものなりと云ふときこそ是れ  
 神を測りたるに當るあり」(Octav., XVIII)ノバミアンの説に従へば神前に  
 在ては能辯も理論も皆啞者なり、議論も思想も遙かに神の下に在り、「如  
 何なる點に於て爾神を云ひ顯はすも爾は神其物よりは寧ろ神の狀態及び

権力の一部を顯はせるものなり」(De Prin., II.)アノピアス曰く「神性に  
 關して人の確知すること唯一ツあるのみ、即ち人間の言語を以て神を顯  
 はすこと能はざるを知ることは是れなり」(III. 19)アレキサンドリアのク  
 レメントも亦た神は凡ての有限的思想を超越するを主張せり、實に氏は  
 消極的に神を解釋する時代の最大の代表者とするを得べし、氏の言に曰  
 く「神は如何なるものなるやを知るにあらず、如何なるものにあらざるや  
 を知るに依りて吾人は稍や全能の理會に達するを得るなり、……………第一元  
 因は空間中にあらず空間時間名稱及び理會を超越したるものなり」(strom,  
 V, II.)神に適用する性質は人間の微弱に相應して附したる者あり、神の  
 唯一さへも尙ほ言ひ得ざることあり、「神は一なり而して一を越へ又「モー  
 ナッド」の上に在るものなり」(Paed., I. 8.)オリゼンの言ふ所に由れば神は了  
 解し能はざるものにして其性質はたとひ至善至明の智力を以てするも人  
 間の窺ふ能はざる者なりと(De Prin., I. 5)前條に記載したるは神の超絶  
 に關して初代の著述家の唱へたる最も過激なる言あれば之を以て全く當

神の超絶と  
 は必ずしも  
 神に付て適  
 當なる智識  
 を少しも有  
 する能はず  
 と云ふにあ  
 らず

時の思想を代表したる者とする能はず、神は知るべからざるものあるを  
 最も大膽に主張したる著述家さへも尙や神に關して一定の知識存するを  
 明言せり、アレキサンドリアのクレメント曰く神の恩恵に依り又神より  
 出づる言に依りてのみ吾人の知らざる者を了解するを得るなり」(strom,  
 V. 12)其の前後の言を比較するときにはクレメントの説は終にたとひ  
 不完全ある知識にもせよ神に關して眞の知識ありとの説に歸結するもの  
 あり、氏の見解に依れば神は二個の意義にて知り得べからざるあり、(一)  
 神の精密に論證し能はざるものあり、(二)神の有限的心意に依りて充分に  
 了解し能はざるものなり、「何人も適當に神を全く云ひ盡すこと能はず」  
 (strom, V. 12)オリゼンは純然たる抽象的の領内に神の觀念を驅入せんと  
 する傾向に於てはクレメント程に甚しからず、不完全ながらも神に關し  
 て眞の知識の存することを確言せり、次の文章は氏の論旨を表はせるも  
 のなり、曰く吾人は知覺にもせよ、若くは反省にもせよ、神に付て得べ  
 き知識は如何なるものにもせよ、神は吾人の知覺する所よりは遙かに優

れることを是非とも信せざるを得ざるなりと(De Prin. I.15.)「神は名稱に依りて表はさるゝ能はずとのセルサスの言は明瞭に解釋するを要す、若し彼は神の附性を表はし得るの言語も記號もなしとの意ならば是れ眞なり、如何となれば言語に依りて表白し能はざる數多の形質存すればなり、例へば椰子と無花果との甘味の差別を言語に顯はす能はざるが如し然るに若しこの句は聴く者をして神の附性の幾分を知るを得べく人性の及ぶ限りに於て幾分か神を了解するを得べきを知らしめんとの意ならば「神の名稱に依りて表し得る」と云ふも敢て理に背かざるなり」(Cont. Cel. VI. 65.)「神は見るべきものにあらず、如何となれば彼は肉躰にあらざるを以てなり、然れども心即ち悟性を以てすれば之を見るを得るあり、心と云ふも唯潔白なる心を以て見るを云ふ」(Ibid. VI. 69.)アイレニアスは「神の洪大なることに關しては」之を知ること能はずと公言したる際も尙其洪大なるは神の自己を人間に啓示する力あるの證據たりと云へり其言に曰「人は自己の力に依りて神を見ずと雖ども神は好み玉ふときは其欲する人に依

神の性質の  
靈たるを願  
みざるの記  
録

りて、又は其欲する時に、其欲する如くに、人に見らるゝなり、如何となれば神は凡てのことに能はざる事なけむばなり」と(VI. 20)一般に云へば初代の神學は神に付て「整成的の知識」よりは更に一層の知識を得べしと唱へたとひ不完全なる知識にもせよ眞正の知識あるを認識せり眞正の境界以外に神の超絶を主張せんとする者ある際に之に反して其眞正の境界まで及ぶこと能はざる者なきにあらず例へばタイタリアンの如き純乎たる靈なる者を理會し得ざるが如し、氏の言に曰く「虚無の外は何物にても形躰を有せざるはなし」(De Carne Christi XI.)氏は直に此思想を以て神に應用せり曰く「たとひ神は靈なりと雖ども誰れか神は形躰なるを拒むを得んや、如何となれば雖は其自己の形躰を有するを以てなり」と(Adv. Prax. VII.)タイタリアンは「形躰」ある語を以て「實躰」と同意義に使用せるものと云ふを得べし、氏は神躰は肉眼に見へざるものにして土塊的の粗糙とは全く反對のものと理會したるは疑ひなきことなれども尙は長高厚を有するものと思惟して之を正當なる物躰の類に含有せしめたるが如し、オ

リセンに従へばタータリアンの前にメリトなる者形骸を神に應用したることあり、其他神性の靈なるを認むると雖も神の遍在を形骸的の類推に従て解釋したる學者中にも斯かる説を唱へたる者ありき例へばアセナゴラスは第二の神を容るゝの地なきを以て唯一の神のみ存在するを得べしと論ぜたり、地なしと云へるは其統轄力に關して云ふと同時に又空間的の意義にて云へるものなり、セオピラスも亦た若し其言ハ氏の思想を不完全に表はしたるものにあらずとせば神の遍在に關して同様の理會を抱けるものなり、然るに斯の如き問題に關して論ずるときには學術的の緻密を欠き易きものなれば輕卒に作者の眞の説を判斷すべからず、神の形骸的性質を斷然放棄して其遍在に關して最も純全たる理會を抱けるものはゾレキサンドリアの諸大家なり、クレメント曰く神は場所に存在するものにあらざして空間と時間とを超越したるものありと(Strom., II. 2.) オルビンは少しにても神を形骸的のものと思惟すべからずと論じ而してキリスト教の空間的意義を有する總念を神に適用するを避くるが故にか

神の力と智  
識とを制限  
する意

のストイック派の唱ふる所の神は万物を貫き万物を自己の中に有するとの説を以てキリスト教の教理となすべからずと公言せり、然るにオリゼンは神の權力と智識とに必然の制限あるを肯言して神の超絶を調和せんとせり、其制限は現今の哲學中にも屢發見する所の無邊無限を知る可らむとの總念に基據を置きたるものなり、この總念を神に應用するときは神の無限若くは其有心的の否定を含有するなり、然るにオリゼンは新プラトニ派に符合するにも拘らず神の有心性を否定するに斷然反對せり、この關係に於て氏の初代數世紀の大體の傾向と一致し神の完全なる自由及自愛即ち語を更へて云へば神の有心性を強く主張せり又氏は自認嫌ひつゝも論理に驅られて神の無限を拒むに至れり、故に宇宙の必然的制限を論じたるるとき神に付て左の如く謂へるを見る、曰く吾人は神の權力を以て有限なりと云はざるを得ず、而して彼を讚美するの口實を以て其制限を取去るべきにあらず、如何となれば若し神の權力は無限なりとせば無限のものと了解し能はざるは是れ自然なるを以て必然



的に無限の權力を了解し能はざるなり、故に神の了解し得るものにして且つ其權下に之を守護し其權理に依りて之を統御し得る丈けの物を創造せり」と又曰「性質よ於て無邊なるものは了解する能はず、何となれば知識性質の其の知る所のものを限るにあればなり」と、オリゼンは斯の如き説を駁り唱ふるに至りたるは全く人間に依りて神を判断したるが故なり、人間の知識は物を制限するの意を含有すれども神の知識は然らず、神の知識は其存在を制限するものにあらず、また神の存在は其知識を制限するものにあらずと理會すべし、制限は存在若くは其知識に關するものにあらず斯く考ふるときはたとひ人間の心意は明白に想像し能はざるは勿論なれども尙ほ神の中には無限の存在と無限の知識の存在の總念を了解するを得べし、

道德的附性

道德的附性に付ては主として神の愛を論ずるに依りて一世の特性を作るに至れるは自然のことなり、然れども尙一層嚴格ある附性を看過すべからず、神の愛に關し、マルシオンの偏頗なる議論に反對して神の公義を論

したるものあり、殊にタータリアンは熱心に神の公義を論せり、氏の論ずる所に依れば神は善を愛し之を保護するの度に準じて必ず惡を憎み又之を罰する者たらざるを得ざるなり、マルシオンの説の如きは決して道德的秩序を維持するに必要な敬神の心を起すに足らざるなり、仁愛と公義の間に矛盾を有する所あらず、「神は全く善なり如何となれば凡ての事に於て彼は善に與すればあり」タータリアンに従へば法律を明かにし罪を惡むは是れ神の人に刑罰を加ふる重要なる動機なりとす、アレキサンドリアの諸家殊にオリゼンは刑罰の正當なる目的を論せり、オリゼンは公義を輕忽にしたるマルシオンに反對し、且つタータリアンと同じく仁愛は公義と完全の調和をなすものにして神を正當に理解するには必ず欠くべからざるものなりと唱へたるを見るなり、然れども氏は神の刑罰を加ふるは親切に出でたるものにして一般に道德的秩序を維持すると共に受刑者の改良の爲めありとの議論を爲して以て甚だ異なる方向に進めり、神の正潔に付て論じたる中罪を犯すの方ありとするは神に制限を置くも

力を犯すの

のありとのオリゼンの説は、価値あるは恐くあらざるべし、氏主張して曰「神は悪を行ふこと能はず、如何となれば悪を行ふの力は神性及び全能の性に反すればなり」と(Conf. Cel., III. 70.)罪に陥るとは疑惑及び微弱を含有するなり、神若し罪を犯すとせば其前に正義の力缺け、云ふ可らざる弱点存せざる可らず、

第二節 「ロゴス」即ち神の子

(第一)、基督教理以前にありし「ロゴス」の教理。

凡そ如何なる思想の系統にもせよ、苟も賤陋ある唯物論の原野に彷徨する乎、或は凡神論の大波中に神と世界との區別を沈入するに非ざる以上は、中保思想を多少負ひざるはなし、是れ蓋し自然の必然あり、何となれば神は高く時間と空間の上に超絶し、物質の特性を脱離し、見る可き世界と全く反対なれば如何にして此高き神と物質とを連結せしめ、其間に橋梁を築き、關係を生せしむ可きやは尤も注意を促がす問題なればあり、此問題を決するに當て初めは神の總念を明かにし、分解するを常とす、

神と宇宙との間に中保者あるの思想は宗教思想に必然なり

即ち神の超絶と兩立して其世界に向ふの性あるを確定し、以て神と世界との隔絶を調和せんと欲するなり、此世界的の性は即ち神の心意中にありて永遠より被造世界の万物の摸型を保有し、所謂神意中の理想世界にして取りも直さず現世界の前形なりとす、爰に於てか神の總念と世界との間に理想世界なる中保を置けり、而して此思想を基礎とし漸次發達して遂には神の總念と神の世界的性質とを區別し、後者を以て稍々獨立の者と見做すに至る、語を替へて云へば神意中に在て理想世界を形造る處の觀念なる者は相集て遂に有意有智の者とせられ、意識を備へたる存在者にして創造事業の器械となり、普通天啓の運搬者と信仰せらるゝに至るなり、斯くの如くにして實際神と世界との中保者を確定するを常とす、而して此中保者は一方に於ては神に含有せらるゝ者なれば真正の神性を有する者とせられ一方に於ては器械と思惟せらるゝ故に下位の者とせらる、「ロゴス」即ち言葉なる名稱は天啓の職務を表するに於て適當なる語なれば自然中保なる哲學的名稱の中に含まるゝに至れり

プレトリーの  
觀念説はキ  
リスト教の  
「ロゴス」説  
の準備たる  
に適す

以上の如く論じ來りて回轉一視すればプレトリー派なる者は「ロゴス」の教理の前驅として數へざるべからず、少くも數ふる丈けの性質を有する者と云はざるべからず、其觀念の説たるや解釋區々にして一定せずと雖も其大體を觀察するとき即ち「ロゴス」の教理に發達すべき分子を含有すること明かなり、例へば觀念を以て感覺以上の實體にして有形宇宙の模型を造り、秀逸眞正の存在を生ずる不變の根源にして、而して絶對の智識を得しむる唯一の中保なりとするが如きは、苟も有神論の信仰を有する人心には漸次發達して神と宇宙の中保者即ち「ロゴス」の教義となるに尤も適當なる者なり、故に猶太人の著述家或は基督教の著述家の書を見るときは往々プレトリーの觀念説を基礎として論ずる者あり、例へばフハイローの中保説は變改定まらずと雖も其中に尤も明かにプレトリーの觀念説に基きて説を爲せし者あり、神が己の無形の附性を摩西に語るの一段に言へるあり、曰く「汝我を圍繞する諸能力は特性を有せざる者に特性を與へ、形狀を具へざる者に定形を與ふる者と思はせざるべからず、又此能力の

神學者の内  
はプレト  
リーの觀念説  
の中に「ロ  
ゴス」の像  
を見し者あ  
るの證

を示す者あ  
るの證は  
神の性質の  
對する

分派を受けざる者は分解散亂するを思考せざる可らざる可らず、汝人類の内或る者の此等の能力を呼んで觀念と云ひしは尤も正當なり、蓋し万有の存在者の皆其特性を之より受け本と順序なき者を整成し、制限なく區畫なき形狀なかりし者を制限し區畫し又形狀を附せし者は即ち此等の諸觀念なればなり」と(On Monarchy, I. 6)爰に能力を複數として顯はせしむるは「神の」の語を以て見れば此等を連射して一となし、諸觀念を包有する一觀念とし「ロゴス」を設定することいと容易なりとす、オリゼンの説を見るは其のプレトリーの説より確かに引照せしと思ふ處甚だ多し、氏曰く万物の「初に生れたる者」又「生み給へる獨子」は「實質の實質」觀念の觀念「万物の原理」と云ふことを得べき乎は即ち討究の問題なり」と(Cont. Cel., VI, 64)其他プレトリーが觀念を以て學問に必然なる條件となし、眞正理性の根源となせるは初代基督教著述家等が「ロゴス」を以て万人中に在て高等理性の原理ありとせる教訓と相合する者に非ずや、プレトリーは其觀念説を以て「ロゴス」の教理の基礎を供せしのみならず其他

他の記録中に  
神の身位  
の複數なる  
を示す者あり

種々の記録を以て神の身位の複數なるを告ぐるに足るべき教訓を爲せり、  
 然レオニシヤスに送る書翰中には曖昧ありと雖も神の身位即ち原性の三  
 おるを云へる語あり、カリーミアス、エラスタス、及びユルシカスに送る書  
 翰中には神なる嚮道者及び嚮道者の父なる語あり、左れども此兩書翰は  
 眞成なりとの考證を欠けば必ずしも之を以て爾云ふにあらざり、レバブリッ  
ク第四巻中よは明瞭に云へるあり、曰く善は己れの像に似たる一子を生  
 めり、又テメーアス中には創造者の其模型に従て宇宙を造り、活ける  
 一靈を以て其中心と定めたりと云へり、今此等の諸言に依てプレト自  
 身は如何なる思想を有せしやを確定するは難問たりと雖も此等の諸言の  
 入心は如何なる思想を誘起せしめしやは自ら明白なり、加之後世新プレ  
ト派ある者起る、當て此等の言を以て其三位説を含有すと稱せり、又  
セホの記する處を見ればプロタナス及びスモニアス共に新プレト  
派は教義でプレトは三大無限の實質を主張せり、即ち善、心及び靈是  
 なると云へるを知る

舊約聖書及  
其他の記録  
にも「ロゴス」  
の教理の  
準備あり

基督の  
誕生の  
頃ハ  
「ロゴス」  
の  
準備あり

又猶太教はプレト派の未だ興らざりし以前に當て已に「ロゴス」の思想を  
 發達せしむべき前提を供したり、例へば舊約聖書にてはエホバの言葉を  
 以て創造及び天啓の器械として顯はすを常とす、下でソロモンの時に及  
 びは智慧を擬人的に顯はすの習慣を生じたるは尙一層「ロゴス」の教理の元  
 素を含有する者と云ふべし、殊に箴言第八章は其尤も重なる者にして、  
 智慧を以て上帝最初の伴侶となし、又其首子となせり、曰く「エホバ古昔  
 其御業を爲しそめ給へる前に其道の始めとして我を造り給ひき永遠より  
 元始より地の有らざりし前より我は立てられ未だ海あらず未だ大なるの  
 泉あらずりし時我れ已に生れ云々」と斯くの如き言語一度推想的の猶太人  
 の心に入るや神と宇宙との中保説を發達せしめずして止まんや、是も於  
 て東洋の宗教と希臘の文學とを兼有し、折衷主義の盛に行はれたる埃及  
 の「アメン」の知智なる書は基督降世前殆ど百年頃に著はされたる者あるが、  
 斯等の如き境遇中に生れたる者なれば自ら哲學的の傾向を顯し、「ロゴス」